



TITLE:

歴史主義の徴候のなかの文化諸科学

AUTHOR(S):

佐々木, 博光

CITATION:

佐々木, 博光. 歴史主義の徴候のなかの文化諸科学. 人文學報 1998, 81: 119-166

ISSUE DATE:

1998-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/48522>

RIGHT:

歴史主義の徴候のなかの文化諸科学

佐々木 博 光

- I 歴史主義論争の再来
- II 歴史認識の「实在論化」
 - 1. 観念論・史的唯物論・実証主義
 - 2. ロマン主義のインパクト
 - 3. ロマンなきロマン主義—学問の「専門職化」—
- III 歴史主義批判の系譜
 - 1. ニーチェ—生の哲学—
 - 2. ヴェーバー(1)—ニーチェ問題にたいする解答—
 - 3. ヴェーバー(2)—「歴史的文化科学」として歴史学—
- IV 歴史主義問題と「歴史的社会科学」

I 歴史主義問題の再来

歴史主義という概念にかんして、ドイツの歴史学にはひとつの理解が存在する。それによると、歴史主義とは「過去の出来事そのものの感情移入的な模写」をめざし、「個性化的な手続」を温存する歴史理解のありかた、すなわち「構造的な分析を犠牲にして」偉大な人物の行動モチーフにかんする問いを優遇する歴史研究のありかたとかんがえられている⁽¹⁾。かかる歴史主義理解は、歴史家フリードリヒ・マイネッケ (Friedrich Meinecke, 1862—1954) の1936年の書物『歴史主義の成立』のなかにみられる歴史主義概念をとらえ、マイネッケが賞賛する歴史主義を伝統史学一般と同一視し、それに批判的に対峙することからうまれてきたものである。マイネッケによると、歴史主義とは、ランケで頂点に達する歴史理解、歴史叙述のありかたで、その本質は個性と発展にかんする問いによって規定されていた⁽²⁾。歴史主義の名でかかる歴史研究のスタイルを理解するものにとって、歴史主義の起源は、啓蒙主義の特徴とされる一般化へとむかう観察方法に対抗するロマン主義運動のなかにしばしばもとめられた。かくして、歴史主義は近代ドイツにおける反近代思想の有力な潮流のひとつにかぞえられ、それがドイツ歴史学のきわめて保守主義的な性向を決定的にしたと理解されることもある⁽³⁾。歴史主義をかかる意味で理解するものにとって、「歴史主義の克服」とは、とりもなおさず歴史理解、歴

史叙述の「民主化」にほかならず、その意味で1960・70年代はドイツの歴史学にとって重大な転機をなすものとかんがえられた。ビーレフェルト学派の「歴史的社会科学」‘Historische Sozialwissenschaft’に代表される「あたらしい歴史学」が、歴史研究を社会科学の理論やモデルのなかに発展的に解消することによって歴史学の「民主化」をなしとげ、それにともないドイツにおける歴史主義の克服は最終的に達せられたとされるのである⁽⁴⁾。

しかし、表題に付した歴史主義という概念のもとでわたしが理解しているのはこのような問題ではない。ここでわたしが念頭においているのは、ヨーハン・グスタフ・ドロイゼン (Johann Gustav Droysen, 1808—84), ヤーコプ・ブルクハルト (Jakob Burckhardt, 1818—97), ヴィルヘルム・ディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833—1911), グスタフ・フォン・シュモラー (Gustav von Schmoller, 1838—1917), カール・メンガー (Carl Menger, 1840—1921), フリードリヒ・ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844—1900), ヴィルヘルム・ヴィンデルバント (Wilhelm Windelband, 1848—1915), ルードルフ・シュタムラー (Rudolf Stammler, 1856—1938), ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel, 1858—1918), エドゥムント・フッサール (Edmund Husserl, 1859—1938), オットー・ヒンツェ (Otto Hintze, 1861—1940), ハインリヒ・リッカート (Heinrich Rickert, 1863—1936), マックス・ヴェーバー (Max Weber, 1864—1920), エルンスト・トレルチュ (Ernst Troeltsch, 1865—1923), エルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer, 1874—1945), カール・ヤスパース (Karl Jaspers, 1883—1969), マルティン・ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889—1976), カール・マンハイム (Karl Mannheim, 1893—1947), カール・レーヴィット (Karl Löwith, 1897—1973), オットー・ブルナー (Otto Brunner, 1898—1982) といった名前が連想させる問題である。かれらの理解する歴史主義とは、反近代思想の系譜に限定されるものではなく、啓蒙思想、革命、産業化、技術化および生活領域全般の科学化とならぶ、近代を構成する重要な要素のひとつとかんがえられている⁽⁵⁾。トレルチュによれば、それは「人間、その文化および諸価値にかんするわれわれの思考全般の根本的な歴史化」であり、克服がめざされたのはこの「歴史化」によってもたらされる絶対的な価値規範の動揺、すなわち人間の生および学問の領域をおそう相対主義の危機という問題にほかならならない。歴史主義とは歴史学固有の問題であるばかりでなく、文化諸科学、さらには文化現象一般におよぶ問題と理解されていたのである⁽⁶⁾。

文化諸科学の内部では歴史主義論争はとりわけ学問的認識の「客観性」にかんする考察として展開された。かつては学問的認識の価値を基礎づけるのは形而上学の役目であった。このふりい形而上学的前提がすべてすがたを消してしまった近代にあって、学問的認識の価値はなにによって保証されるのか、学問的認識の「客観性」なるものはいかにして根拠づけることができるのか、かかる科学認識論上の課題が歴史主義の名で活発に議論された問題であった。そして、しばしば根拠づけを欠く知識の洪水が価値観の混迷以外のなにものをももたらさないこと、

現実社会のなかで学問に約束された比重の大きさとくらべて、それがわれわれの生に指針をしめすところのすくないことが批判の対象となった。ひとことというならば、歴史主義論争とは、相対主義やそれがもたらす学問と生の二律背反の進展を危機とうけとめるものによる既成の学問にたいする告発であり、近代社会におけるよりよき学問のありかたを模索するところみであったといえる。

かかる歴史主義問題は、前世紀の70・80年代以降ドイツの文化諸科学において問題視されはじめ、とりわけ今世紀の20・30年代には「歴史主義の克服」、「歴史主義の危機」といったスローガンのもとで活発に議論された⁽⁷⁾。しかし、その後この問題は今世紀の後半には等閑に付された観がある。かかる歴史主義問題がひさしく棚上げされてきた理由をあえてさがすとすれば、学問の価値を基礎づけることをめざした議論が、反アカデミズムの思潮と合流し、社会生活の野蛮化をもたらしたかつての苦い体験を抜きにしてはかんがえられない。学問的認識の「客観性」にかんする考察が、学問の価値そのものを否定するものとうけとめられかねない空気が戦後のドイツには存在した。「あたらしい歴史学」によって60・70年代に克服されたとされる歴史主義も、20・30年代にその克服が真剣に議論された歴史主義とはまったく異質な問題になってしまったのである⁽⁸⁾。

すでにふれたように、歴史主義問題がふるい形而上学的前提が死滅した時代における学問のありかたをめぐる考察である以上、もとより最善のこたえをのぞむことはできない。しかし、学問の存立の根幹にかかわる問題を棚上げしたままで、意味のある学問体系をきずくことができるとおもえない。80年代にはいり、歴史研究を社会科学の理論やモデルに解消しようとする、70年代にさかんであった研究動向の有効性を疑問視する声が大きくなりはじめた。それと並行して、「社会諸科学の広範な再歴史化」の進行が指摘されて久しい⁽⁹⁾。近年歴史学のみならずドイツの文化諸科学において歴史主義論争がふたび熱をおびてきている理由がここにある。そこで議論されているのは、まさしく20・30年代に白熱した学問的認識の価値を基礎づけるための諸問題にほかならない。そして、わたしがここで考察の対象とするのも、この歴史主義問題であることをあらかじめおことわりしておきたい。

かかる歴史主義問題の歴史を念頭にのこしたうえで、以下の学問史的な考察は「問題史」Problemgeschichteのたちばからすすめられる。問題史的な学問史の意義にかんしては、すでにヴォルフ・レペニエスがすぐれて分析をおこなっている⁽¹⁰⁾。レペニエスによれば、「歴史の学」と「学の歴史」のあいだにはふるくから埋めがたい対立関係が存在した。そして、そのことが学問史が自律的な一分野として自己形成するのをさまたげてもいたのである。しかし、歴史家たちは学問史の必要性を全面的に否定していたわけではない。たとえば、レオポルト・フォン・ランケ（Leopold von Ranke, 1795—1886）は、1858年9月30日にミュンヘンの「バイエルン王立科学アカデミー歴史学委員会」の創立準備委員会に提出した請願のなかで、「詩に

かんする歴史」にたいしてかぞえきれない個別の寄与がなされたことを確認したうえで、つぎのように語っている。

それにもかかわらず、学問的な成果の歴史にかんしてはなんらまとまりのある教説も存在しない。ドイツにおいて諸学の歴史をうみだすことができるならば、まこと、それは真の国民的な業績となろう⁽¹¹⁾。

しばしば実証主義史学の祖とたたえられるランケも、「諸学の歴史」の必要性を痛感していたのである。ただし、それが「学問的な成果の歴史」に限定されていることはわすれられるべきではない。そして、この限定が「伝統的な学問史」研究のありかたをつよく規定することになったのである。そこから生じる「伝統的な学問史」の閉塞状況を克服するために、レペニエスは問題史的な考察の意義を強調するわけであるが、その内容はおおむね以下の三点にまとめることができる。

- (1) 「学問的な成果の歴史」に自己限定する「伝統的な学問史」には「学問的なデカダンスの歴史」は存在しない。このばあい、学問史はつねに「認識の進歩の歴史」を記述することを義務づけられてきた⁽¹²⁾。しかし、ここであつかう科学認識論上の問題としての歴史主義問題にかんしては、20年代の議論の水準をその後の研究はいぜんとしてこえることができていないという有力な意見が存在する⁽¹³⁾。したがって、安易な進歩史観に流されないためにも問題史の考察方法が不可欠となる。
- (2) 「伝統的な学問史」はどちらかといえば「単一学科」の考察に従事してきた。つまり、「個別学科の発展を長期にわたって追跡する」スタイルが好まれてきたのである⁽¹⁴⁾。しかし、歴史主義のような危機現象が問題となるばあい、この方法は弱点を露呈することになる。なぜなら、レペニエスも指摘しているように、「ひとつの学科だけが危機に陥るということはまれな例外」にぞくするからである⁽¹⁵⁾。問題史的な考察によって、「複数学科をおおう」危機現象の考察がはじめて可能となる⁽¹⁶⁾。
- (3) さいごの問題は歴史一般がもつ機能と関連している。「学科史の伝統的な役割」は、学科の「正当性の獲得および強化のために年功Anciennitätを証明すること」にそそがれてきた。学科の回顧は、「競合する諸学科からおのれをきわだたせ、そのさい模範となった諸学科としてできるだけ威信のある諸学科をえらぶ」ことにつとめてきた。しかし、レペニエスによれば、「正当性の獲得とアイデンティティの強化は学科史のふたつの機能にすぎず」、学科史の役割はけっしてそれにつきるものではない⁽¹⁷⁾。

それ以上に、学科史はそこでさまざまな理論がためられるある種の実験室とみなされる。

学科史は問題設定のためのてびきを提供し、研究が迷路にふみこむのをふせぐことに寄与しなければならず、一定の問題状況にそくして学科の発展の初期段階とくらべ方法的な洗練が増したことを認識させ、さいごにそこから学科の将来にたいする診断が導きだされるような一種の推定を可能にしなければならない⁽¹⁸⁾。

問題史的な考察とは、「伝統的な学問史」の「肯定的な目標設定」を共有するものではなく、むしろ「批判的な目標設定」をもつものである⁽¹⁹⁾。

研究対象、研究方法にかんする以上の検討をふまえつつ、ここでの歴史主義問題にかんする問題史的な考察は以下の手順ですすめられる。歴史主義の名でよばれる諸問題が本格的に認識されはじめるのは、19世紀後半、とりわけ世紀転換期以降のことである。このことは、そこで認識された問題の形成がすでにそれ以前にすすんでいたことを意味しているといえよう。歴史主義というカテゴリーに分類される学問の諸潮流に共通するのは、認識の万能にたいする全幅の信頼である。この全幅の信頼を構造化させた要因がここでまず検討されなければならない。そして、それが学問の「専門職化」の進行と表裏の関係にあることがあきらかになるう。

歴史主義として議論される諸問題が学問の「専門職化」にともなう必然的な帰結であるとするれば、そこから脱出する道はどこにもとめられるのであろうか。ここでは、歴史主義問題を学問の「専門職化」との関連で考察したふたりの思想家の歴史主義問題にたいする対応を問題史的に考察する。まず、歴史主義論の問題史上の先駆者とみなされるニーチェが投じる諸問題と、それにたいしてかれ自身があたえている解答を検討し、その限界と問題点をあきらかにする。つぎに、ニーチェの投じた諸問題に、ニーチェとはことなる地平でこたえようとしたヴェーバーの解答を吟味し、近代において学問研究がとりうるひとつの方向性、さらにそのなかにしめる歴史学の位置を確認することになるう。

さいごに、ヴェーバーの歴史主義問題にたいする解答が、戦後の「あたらしい歴史学」にいかなるかたちで継承されたのかが問題史的に考察されなければならない。歴史主義問題がヴェーバーの科学論におよぼした影響という視点を欠き、ヴェーバーの功績を歴史主義問題とは独立にあつかおうとする「歴史的社会科学」は、われわれの問題にする歴史主義を克服するものではないこと、「歴史主義の彼方の歴史学」⁽²⁰⁾はそれとはことなる方向にひらけていることを示唆するつもりである。

(1) Mommsen, Wolfgang J., *Die Geschichtswissenschaft in der modernen Industriegesellschaft*, in: *VfZG*. 22, 1974, S.1ff.引用は, S.2f.

(2) Meinecke, Friedrich, *Die Entstehung des Historismus*(Friedrich Meinecke, *Werke* 3), München 1965².

(3) 歴史主義の起源をロマン主義にもとめる理解としては, Rüsen, Jörn, *Konfigurationen des*

Historismus. Studien zur deutschen Wissenschaftskultur, Frankfurt a.M. 1993, S.17f.; Blanke, Horst Walter, *Historiographiegeschichte als Historik*, Stuttgart 1991, S.47ff., S.60ff. und S.76ff. 歴史主義を保守主義と同一視する理解の存在については、以下の文献の整理を参照。

Steenblock, Volker, Zur Wiederkehr des Historismus in der Gegenwartsphilosophie, in: *Zeitschrift für Philosophische Forschung* 45, 1991, S.209ff.とくに, S.213f.

- (4) 近代史家にとくに顕著にみられるこのような理解にたいする批判的な考察として, Graus, František, Die Einheit der Geschichte, in: *HZ* 231, 1980, S.631ff.
- (5) Oexle, Otto Gerhard, *Geschichtswissenschaft im Zeichen des Historismus*, Göttingen 1996, S.17f.
- (6) Troeltsch, Ernst, *Der Historismus und seine Probleme*(*Gesammelte Schriften* 3) (1922), Nachdruck Aalen 1977².引用は, S.102.邦訳は, 近藤勝彦訳『トレルチ著作集4 歴史主義とその諸問題 (上)』ヨルダン社, 1980年。引用は, 157頁以下。
- (7) たとえば, Troeltsch, Ernst, *Der Historismus und seine Überwindung* (Berlin 1924, Neudruck 1966); Heussi, Karl, *Die Krisis des Historismus*, Tübingen 1932. (佐伯守訳『歴史主義の危機』イザラ書房, 1974年)。
- (8) 歴史学と他の文化諸科学をへだてるふたつの歴史主義理解の由来については, 拙稿「歴史の功罪—ドイツにおける歴史主義論の再燃によせて—」『西洋史学』184号, 1997年, 18頁以下。Oexle, a.a.O., S.41ff. und S.95ff.
- (9) Acham, Karl und Schulze, Winfried (Hg.), *Teil und Ganzes*(*Theorie zur Geschichte. Beiträge zur Historik*, Bd.6), München 1990, S.7.
- (10) Lepenies, Wolf, Wissenschaftsgeschichte und Disziplingeschichte, in: *GG* 4, 1978, S.437ff.
- (11) von Ranke, Leopold, *Abhandlungen und Versuche. Neue Sammlung*, Leipzig 1888, S.490.
- (12) Lepenies, a.a.O., S.442.
- (13) Steenblock, a.a.O., S.223; Oexle, Otto Gerhard, Geschichte als Historische Kulturwissenschaft, in: Hardtwig, Wolfgang und Wehler, Hans—Ulrich(Hg.), *Kulturgeschichte Heute*, Göttingen 1996, S.14ff.
- (14) Lepenies, a.a.O., S.444.
- (15) Ebd., S.450.
- (16) Ebd., S.444.
- (17) Ebd., S.449.
- (18) Ebd., S.449f.
- (19) Ebd., S.450.
- (20) この表現の由来は, Mommsen, Wolfgang J., *Die Geschichtswissenschaft jenseits des Historismus*, Düsseldorf 1971.

Ⅱ 歴史認識の「实在論化」

1. 観念論・史的唯物論・実証主義

神学者エルンスト・トレルチュは1922年の著作において歴史主義を「われわれの認識および思考の根本的な歴史化」と定義する⁽¹⁾。そして、トレルチュにとって歴史主義問題とはこの「歴史化」がもたらす絶対的な価値規範の動揺、その結果生じる相対主義、およびそれが生におよぼす破滅的な作用と理解されている。かかる歴史主義理解は20・30年代の文化諸科学において広範な合意をみだした。しかし、歴史主義問題の克服のためにトレルチュがしめす方向は満足にあたえるものとはならなかった。トレルチュは、「もろもろの有限精神の無限精神と本質的で个性的な同一性が、まさにそれゆえにこの無限精神の具体的な内実と動的な生の統一性にたいする直観的な参与が、われわれの問題を解決するためのかぎである」という⁽²⁾。トレルチュは「歴史化」がもたらした相対主義の危機を、絶対的な価値規範を「再建」することによって克服しようとするのである。この「再建」のためにえらばれる規範こそが「ヨーロッパ文化の発展にかんする時代区分」にはかならない。そして、それは「普遍史」と同一視される。トレルチュにとって、歴史認識が現代的な要請から疎遠になり、硬直化するという問題を解決するためには、「普遍的発展史から明白になってくる建設、つまりわれわれの文化圏の巨大な諸層の建設」が必要となるのである⁽³⁾。

トレルチュにむけられた批判の大半は、トレルチュが解決策として呈示する「建設」の有効性にかんするものであった。たとえば、社会学者カール・マンハイムは、トレルチュのしめす「時代区分のプラン」はあまりにも「唐突」にすぎ、歴史主義問題を克服するための方向性をあたえるものではないという。結果的にマンハイムは、トレルチュを「歴史主義の理論への正しい出発点を発見した人」と評価するものの、トレルチュが「原理的な最終的解決という点では、比較的わずかの成果しか明確化できなかった」ことを指摘するのである⁽⁴⁾。

トレルチュは歴史主義の名で議論されてきた問題を正確にとらえはしたが、問題の解決の方向をあやまった。ここに歴史主義問題を考察するものにとっての最大の困難がある。この困難をふまえたうえで、歴史主義問題の考察に有益な視座をしめしているのが、歴史家オットー・ヒンツェのトレルチュの著作にたいする書評である。ヒンツェは、トレルチュの「思考連関全体を支配する形而上学的な想定」の存在を批判し、「まさしく神の精神の自己運動」と理解される「普遍的な発展」にトレルチュがみとめる「客観性」にはまったく共感をしめさない⁽⁵⁾。ヒンツェにとって、トレルチュは「ライプニッツではじまり、ヘーゲル、ランケで頂点に達するドイツ観念論の垂流」としかうつらないのである⁽⁶⁾。さらにヒンツェは、「生の統一性にたいする直観的な参与」に歴史主義問題の解決の糸口をみるトレルチュの理解をとらえ、そこでは「感情論」が「認識論」を圧倒していると批判する⁽⁷⁾。ヒンツェは、この「認識論」の

「感情論」へのすりかえという事態に、歴史主義問題をかんがえるうえでのもっとも大きな困難をみるのである。「認識論」の問題が「感情論」の問題にすりかわるのを避けるために、ヒンツェは、「一般的な世界観・生命観」の問題としての歴史主義と、「たんなる思考過程」、「精神の論理的なカテゴリー構成」の問題としての歴史主義を明確に区別することを提案する⁽⁸⁾。ヒンツェのいわんとするところは、相対主義の危機というかたちで議論される生の問題としての歴史主義と、認識論上の問題と理解される科学の問題としての歴史主義を、いったん峻別することの要請といいかえることができる。

ここでの議論はヒンツェの提言にそってすすめられる。なぜなら、在来の歴史主義論では、問題のふたつの地平がいっしょにあつかわれたために、生の問題と理解される歴史主義の解決は、歴史の放棄からしかえられないとしばしば誤解されることがあったからである。しかし、歴史の放棄は、トレルチュのいうように、「ただ野蛮状態にむかって決心すること」としかかえられず、それは「ただその他いっさいの生活領域においても野蛮状態に逆もどりすること」によってしか達せられない⁽⁹⁾。議論がかかる迷路に陥らないためにも、生の問題として議論すべき歴史主義と、科学の問題と理解される歴史主義をいったん峻別するという視点がぜひとも必要となる。そのうえで、ヒンツェの定義にしたがい、ここでは、歴史主義の構成要素として三つの思想潮流—「観念論」、「マルクス主義」、「実証主義」⁽¹⁰⁾—を念頭におくことにしたい。

ヒンツェは歴史主義なる精神運動の特徴をその認識論上の前提にみる。かれはそれを科学認識論の慣例にならって「實在論的」「realistisch」とよぶ。歴史をうごかす理念、法則を問題とするのか、個別の対象をあつかうのかはべつとして、「それがほんらいいかにあったのか」を現実体として把握できるとするたちばであるといつてよい。このたちばは「対象が認識を規定する」という認識論上の前提を特徴とし、認識とは独立に対象が存在することを前提することになる。この前提にたつかぎり、認識はあらゆる対象を「対象そのもの」としてとらえることが可能とされ、認識の万能が暗黙のうちに想定されることになる。いっぽう、「實在論」に対立するたちばを、ヒンツェはやはり科学認識論の慣例にならって「唯名論的」「nominalistisch」とよぶ。このたちばは、「實在論」とは逆で、「認識が対象を規定する」という認識論上のたちばをとり、したがって認識とは独立に対象が存在することはありえないことになる。この前提にたてば、認識が「対象そのもの」ととらえることは不可能とされ、われわれがふつう「対象そのもの」とかんがえているものは、われわれに認識された対象、すなわち対象の「表象」でしかないことになる。「唯名論的」な前提にたつものは、ひとつの対象にたいして無数の「表象」がなりたつことをみとめることになり、したがって認識の限界を考察の出発点とせざるをえない⁽¹¹⁾。ヒンツェは「唯名論的」な認識手続にこんごの歴史研究がすすむべき方向をみるのであるが、かれの理解するところでは、当時の歴史研究の主流にあったのは「實在論的」な認

識手続であった。そして、かかる観点から、ヒンツェは歴史主義という概念のもとに「観念論」、「マルクス主義」、「実証主義」を包摂できるとかんがえるのである。

観念論的な歴史認識は、19世紀の前半にヴィルヘルム・フォン・フンボルト（Wilhelm von Humboldt, 1767—1835）によって根拠づけがなされ、レオポルト・フォン・ランケによって模範的に実践された。ランケの認識論上のたちは客観的な歴史認識の可能性にたいする信頼を特徴とし、この姿勢は終生かわることがなかった。ランケは1824年に歴史家の課題を「それがほんらいいかにあったか」をしめすことであるとのべている⁽¹²⁾。ランケにとって歴史叙述の目標は、「客観的な描写」、「まったき真理の現在化」⁽¹³⁾、事物の「本質」の認識にほかならなかった⁽¹⁴⁾。しかし、観念論的な歴史認識にあっては、実証主義のばあいとはことなり、歴史家の任務はそこにとどまるものではない。フンボルトは1821年の論稿において歴史記述者の任務を以下の二点にまとめている。いっぽうで、歴史記述者の任務は「おこったことの描写」であり、それは歴史史料との経験的なとりくみからえられる⁽¹⁵⁾。むろん、これだけでは歴史記述者の任務はじゅうぶんとはかんがえられず、歴史記述者が「歴史そのもの」、「あらゆるできごとの真相」を獲得するには作業方法の第二の要因が必要となる。フンボルトはそれを「直観能力」

‘Ahnungsvermögen’、‘結合の才覚’ ‘Verknüpfungsgabe’ とよぶ⁽¹⁶⁾。これは歴史の「必然性」をさぐりだすために不可欠のものとされ、フンボルトによればこの「必然性」を決定しているのが「もろもろの理念’Ideen’」にほかならない⁽¹⁷⁾。「必然性」としての「もろもろの理念」こそは歴史を「うごかすほんとうの原動力」であり⁽¹⁸⁾、したがって、歴史記述者の課題も「現実のなかに実存を獲得しようとする理念の動向を記述すること」となる⁽¹⁹⁾。観念論的な歴史認識は、歴史をうごかす理念の把握が可能であるとする点で実在論的である。むろん、のちに実在論的な歴史認識のなかで主流をしめることになる実証主義とくらべたばあい、実証主義の真理にたいする要求が内在的であるのにたいして、観念論のそれが先験的・形而上学的であるというちがいは存在する。しかし、認識の万能にたいする信頼という点では両者にさほど大きな差はない。ランケもまた観念論的な歴史認識のありかたと無縁ではなかった。かれも「精神の本質」、「神の意図」としての理念の存在を信じており⁽²⁰⁾、「歴史学はあらゆる実在のなかに無限なるもの」の存在を認識し、「あらゆる状態、あらゆる実体のなかに神に由来する永遠なるもの」の存在を確認するという⁽²¹⁾。また、この観念論的な歴史認識の一流派として、ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770—1831）の歴史哲学をくわえることもゆるさるよう。ただし、ヘーゲルにおいては、フンボルトのいう歴史をうごかす「必然性」としての「もろもろの理念」は、単数の「理念」によっておきかえられている。したがって、かれの歴史叙述は、東から西へと発展する理性の自己実現の過程としての世界史というスタイルをとることになる。いっぽう、ランケは「もろもろの理念」の結合のありかた、その実現の度合を問題にするがゆえに、歴史のより個性的な発展を重視する。したがって、ランケにとっては、神

の意志の実現過程としての各国史を叙述することが目標となる。ランケがくりかえしヘーゲルにたいして反抗的な態度でのぞんだことは周知の事実であろう。しかし、トレルチュのことは借りるならば、それは「偉大な息子たちが自分たちの祖父にたいしてしめす忘恩のすがた」以上のものではないのである⁽²²⁾。

史的唯物論の認識論上の前提もまた実在論的であるという理解はけっしてめあたらしいものではなかろう。カール・マルクス（Karl Marx, 1818—1883）は、1845年のフォイエルバッハにかんする第二テーゼにおいて、「人間の思考に対象的な真理がぞくするかどうかという問題」、「実践から遊離している思考が現実的であるか非現実的であるかという論争」を、「純粹にスコラ学的な問題」、すなわち退屈でとるにたりない問題としてしりぞける。なぜなら、思考の現実性や真相にかんする問題は、「理論の問題ではなく、実践の問題」だからであり、「実践のうちで人間はその思考の真理を、いいかえれば、その思考の現実性と力、此岸性を証明しなければならない」からである⁽²³⁾。しかし、いったん放逐された認識論の問題は史的唯物論にすぐさまふりかかる。なぜなら、マルクス主義の意味する「実践」とは、これまでのすべての社会の歴史が階級闘争の歴史であったかどうかにかんしてひとえにかかっているからである。史的唯物論にとっては、歴史を認識するということは歴史的諸事象およびその根底にある法則をあばくことにはかならない。そのさい、この過程は客観的な真理への接近という性格を有するものとされる。けっきょく、無数の観点のうちのひとつでしかない観点到、ひとつ以上の意味をこめているという点で、史的唯物論もまた観念論とおなじく実在論的だといわねばならない。

さいごに、19世紀後半、とりわけフランスで、イッポリート・テーヌ（Hippolyte Taine, 1828—1893）に代表される実証主義的な歴史学も、歴史主義を構成する重要な一要素とかがえることができる。歴史学の実証主義的な方向においては、「法則的な自然科学の思惟」にならない、歴史は「自然法則的ないしまった統計学的に把握可能な個々の要素」に還元される。つまり、歴史は「定式のかたちで法則的に叙述可能な変化系列、多数の経過を比較することによって確定される変化系列」として把握されることになる。モデルとなる自然科学は「物理学」から「生物学」へ、そこからさらに「精密自然科学的な心理学」へとうつりかわったが、多様な歴史事象を自然法則に還元するという前提はかわらなかった⁽²⁴⁾。ひとつの観点を絶対視するという点で、実証主義も歴史主義の重要な一潮流をなすことになる。そして、このたちはドイツにおいてはカール・ランプレヒト（Karl Lamprecht, 1856—1915）のなかに著名な信奉者をみいだした。ランプレヒトは、普遍史のプロセスを放棄し、「個々の民族の発展のなかにある心理学的・法則的な段階系列」にひたすら執着した。かれはこの段階的連続の法則を、「類型主義」から「印象主義」にいたるまでの八段階によって展開し、通俗的なとりあつかいによってそれを古代、中世、近代の段階的連続として特徴づける⁽²⁵⁾。ランプレヒトにおいても心理学的法則がひとつの観点以上の役割をあたえられているのである。ランプレヒトの歴史理

論、歴史叙述も歴史主義をけっしてこえるものではなかった。したがって、19世紀末にドイツ歴史学がまきこまれた大論争、ランプレヒトの歴史理論、歴史叙述をめぐるいわゆる「方法論争」においても、問題が歴史主義の諸潮流間の主導権争いの域をでることはついになかったのである⁽²⁶⁾。

しかし、ドイツの歴史的諸科学において、しばしば侮蔑のことばとして通用する実証主義はこの論理的な実証主義ではない⁽²⁷⁾。ドイツにおいてそれ以上にひろく普及したのは、中世史家フランティシエ・グラウスが指摘する「些末実証主義」‘Trivialpositivismus’である。この研究方向が前提とするところは、グラウスによれば、「史料の報告のモザイク状の小石から過去にかんする「真の」像を再構築するためには、「清潔に研究をすすめれば」“sauber zu arbeiten”ことたりするという幻想」にはかならない⁽²⁸⁾。このたちは、観念論、史的唯物論、論理的な実証主義とことなり、歴史を構成するさいに特定の観点が介在することを否定することに特徴がある。しかし、現実問題としてなら観点をもたずに歴史を再構築することは不可能といえる。したがって、些末実証主義も、みずからのよってたつ観点を対象化しえないという点で、観念論、史的唯物論、論理的な実証主義と同列にあつかうことが可能となる。

ここではヒンツェの提言をいれ、科学の問題として議論すべき歴史主義と、生の問題と理解される歴史主義をいったん峻別して議論をすすめることにする。そのさい、歴史主義を構成する要素として観念論、史的唯物論、実証主義を念頭におく。これらの諸潮流とドイツ歴史学ならびに歴史的諸科学の関係について、ここで一瞥がなされなければならない。観念論が歴史認識のありかたに影響力をふるったのは、19世紀前半というかぎられた時期であった。これにたいして、史的唯物論はドイツの歴史学および歴史的諸科学においてついに有力な潮流となるにはいたらなかった。むしろ、19世紀後半以降しだいに影響力をますのは、実証主義、なかでも些末実証主義と批判される潮流にはかならない。したがって、歴史的諸科学における観念論から些末実証主義への移行という一種のパラダイム転換の原因が、つぎに究明されなければならない。この課題の解明は以下の行論にとっても重要となる。すでに指摘したように、19世紀後半以降歴史主義批判の論陣を張った思索家たちは、歴史主義を西欧近代の体験した問題ととらえていた。しかし、しばしば指摘されるところであるが、かれらの関心はあくまでもドイツにあったのであり、さらに、かれらの歴史主義批判の行論のなかで主として念頭におかれたのは歴史学の些末実証主義的な傾向であった。したがって、批判者の論点の有効性を吟味するためにも、ぜひともまず観念論から些末実証主義への移行の原因が究明されなければならないのである。

(1) Troeltsch, *Der Historismus und seine Probleme*, S.9.邦訳は、『諸問題（上）』, 26頁。

(2) *Ebd.*, S.677.邦訳は、『トレルチ著作集6 歴史主義とその諸問題（下）』, 310頁。

- (3) *Ebd.*, S.770.邦訳は、『諸問題（下）』, 342頁。
- (4) この論稿の初出は1924年。ここでは以下の邦訳を参照。カール・マンハイム著（徳永恂訳）『歴史主義』未来社, 1970年, 50頁以下。
- (5) Hintze, Otto, Troeltsch und die Probleme des Historismus(1927), wieder abgedruckt in: Ders., *Soziologie und Geschichte. Gesammelte Abhandlungen*, Bd.2, Göttingen 1964³, S.323ff.引用は, S.367.
- (6) *Ebd.*, S.324.
- (7) *Ebd.*, S.325.
- (8) *Ebd.*, S.327.
- (9) Troeltsch, *a.a.O.*, S.4.邦訳は、『諸問題（上）』, 17頁以下。
- (10) Hintze, *a.a.O.*, S.329.
- (11) *Ebd.*, S.329 und S.338.
- (12) von Ranke, Leopold, *Geschichten der romanischen und germanischen Völker von 1494 bis 1514*(1824), *Sämtliche Werke*, Zweite Gesamtausgabe, Bd.33/34, Leipzig 1874, S.VII.
- (13) von Ranke, Einleitung zu den *Analecten der englischen Geschichte*, *Sämtliche Werke*, Zweite Gesamtausgabe, Bd.21, Leipzig 1877, S.114.
- (14) von Ranke, Idee der Universalhistorie, hg.v.Kessel Eberhard, in: *HZ* 178, 1954, S. 296.
- (15) von Humboldt, Wilhelm, Über die Aufgabe des Geschichtsschreibers, in: Ders., *Werke*, hg.v.Flitner, Andreas und Giel, Klaus, Bd.1, Darmstadt 1969², S.585f.
- (16) *Ebd.*, S.587.
- (17) *Ebd.*, S.603ff.
- (18) *Ebd.*, S.590.
- (19) *Ebd.*, S.605.
- (20) von Ranke, Politisches Gespräch (1836), in: Ders., *Die großen Mächte, Politisches Gespräch*, hg.v.Schieder, Theodor, Göttingen 1958, S.61.
- (21) von Ranke, Idee, S.295.なお、ランケの歴史叙述にみられる「神」や「神性」といった概念の重要性については、ヘルバート・シュネーデルバッハ著（古東哲明訳）『ヘーゲル以後の歴史哲学』法政大学出版局, 1994年, 43頁以下。とくに, 60頁。
- (22) Troeltsch, *a.a.O.*, S.243ff.引用は, S.271.邦訳は、『諸問題（中）』, 36頁以下。引用は, 78頁。
- (23) Marx, Karl und Engels, Friedrich, *Werke*, Bd.3, Berlin 1958, S.5.邦訳は、エンゲルス著（松村一人訳）『フォイエルバッハ論』（岩波書店, 1980年²²）所収の「付録 フォイエルバッハにかんするテーゼ（カール・マルクス）」。
- (24) Troeltsch, *a.a.O.*, S.371ff.邦訳は、『歴史主義とその諸問題（中）』, 223頁以下。
- (25) *Ebd.*, S.459ff.邦訳は、『諸問題（中）』, 348頁以下。なお、ランプレヒトの問題設定の特徴については, Schorn-Schütte, Luise, Karl Lamprecht. *Wegbereiter einer historischen Sozialwissenschaft?*, in: Hammerstein, Notker(Hg.), *Deutsche Geschichtswissenschaft um 1900*, Stuttgart 1988, S.153ff.とくに, S.160ff.
- (26) Oexle, *Geschichtswissenschaft*, S.33.
- (27) フランスとドイツにおける実証主義概念のニュアンスのちがいについては, フリッツ. K. リンガー著（西村稔訳）『読書人の没落』名古屋大学出版会, 1991年, 197頁以下。
- (28) Graus, *a.a.O.*, S.631ff.とくに, S.635.

2. ロマン主義のインパクト

すでにふれたように、げんざいドイツの文化諸科学には大別するとふたつの歴史主義理解が存在する。ひとつは啓蒙思想の一般化的な認識手続に対抗する個性化された認識手続に歴史主義の本質をみようとするたちばで、歴史主義はしばしばロマン主義と同一視される⁽¹⁾。これにたいして、ここであつかう歴史主義は、啓蒙思想がひらいた西欧近代を特徴づける構成要素のひとつと理解される。むろん、後者のたちばにたつものも、ロマン主義が歴史主義の発展にあたえたインパクトをけって否定するわけではない。ただし、力点のおきかたは前者の場合と微妙にことなる。前者のたちばをとるものは、伝統との急激な断絶にたいする反動として過去にたいする関心が異様なまでにたかまったことをロマン主義の影響とかがえるのにたいして、後者のたちばをとるものにとっては、ロマン主義のおよぼした最大のインパクトは、歴史的諸科学における些末実証主義的な傾向の浸透にもとめられるのである⁽²⁾。前者の理解を代表する史学史家イェルン・リューゼンは、その近著において実証主義を歴史主義概念から排除すべきことを主張している⁽³⁾。これはリューゼンがその克服をめざしている歴史主義が、マイネッケによってあらたに解釈しなおされた歴史主義であることに起因するようにおもわれる⁽⁴⁾。いずれにせよ、ふたつの歴史主義論がことなる問題をあつかっていることがここからもあきらかとなろう。ここではまず、前者の理解が想定するロマン主義のインパクトについて検討し、この見方の射程をかんがえてみることにしたい。

近代史家トーマス・ニッパードは19世紀を「科学の世紀」とよび、人間のあらゆる生活領域に科学的な思考の支配が貫徹しはじめた時代と位置づける⁽⁵⁾。さらに、ニッパードは19世紀以降の人文・社会科学が経験した変動を哲学の支配にかわる「歴史の世紀」の到来と特徴づけ、このころ文化科学の諸分野で顕著になった「歴史学派」の台頭にその兆候をみる。そして、その原因は当時の急激な社会変動にたいする反発にもとめられる。つまり、フランス革命や啓蒙思想のもたらした合理主義精神の影響によって、また産業化や都市化、それがもたらした危機意識によって、過去とのふかい断絶感がつよく意識されるようになり、それにたいする反動としてこのころ歴史への関心がたかまったとみるのである⁽⁶⁾。もとより、歴史にたいする関心のたかまりの背後に伝統社会の解体をみようとする理解はニッパードのオリジナルというわけではなく、この問題にたずさわる大方の研究者の共通認識であるといっていよい⁽⁷⁾。そして、かかる理解は史料的にみてもじゅうぶんな根拠を主張しうるのである。ここでは、それにかんする三つの例を紹介することにする。

ドイツにおける国文学・民俗学研究の草分けとされるヤーコプ・グリム（Jakob Grimm, 1785—1863）の遺稿のなかに「ドイツの詩と歴史の友すべてへのよびかけ」というタイトルの一篇がある。この作品はのちに発見されたものであり、その執筆年代は不明なのであるが、当時の社会変動が歴史研究にあたえたインパクトをはかるといわれわれの関心にまたない素

材を提供してくれる。この作品は古俗収集の第一人者であったグリムが、収集者のために作成しようとしたマニュアルである。そこでかれは古俗収集の意義をつぎのように強調する。

かかる理念（古俗を尊重しなければならないという理念…筆者補）に満たされ、ふるい歌謡を尊重する気風がふたたびたかまり、印刷や熱心な編纂によって保存されている。また他方で救うべきものを救う努力がなされている。（中略）。個性的なもの、たとえば独特の話しかた・伝説・慣習・習俗を集めなければならない時期が来ている。すべての破壊が進行するまえに、あるいはあたらしいモードが伝統の意味を根こそぎにってしまうまえに⁽⁸⁾。

ここでグリムのいう「救い、集める」は、まさしく当時の人文科学者の合言葉であった。そして、ここにはのちにドイツの歴史研究がすすむことになる方向も暗示されている。つまり、オリジナルな史料の探索とその編纂に重きをおくという風潮である。グリムのしめした方向は専門科学となった国文学研究のなかに着実に継承された。世紀中葉に創刊されたこの学科の機関誌に序言をよせたモーリッツ・ハウプト（Moritz Haupt, 1808—1874）は、国文学研究をつぎのように意義づけている。

慣習・法・古事のなかに、集め、研究し、解釈しなければならないものがどれだけのこされているかはだれの目にもあきらかである。かくして、学問にとって、さしあたりさっこの教養の変化のなかでますますたれゆくふるい時代の痕跡を救うことが重要となる⁽⁹⁾。

ここでもやはり「救い、集める」ことが強調されている。

「救い、集める」ことにたいする熱意はけっして国文学者や民俗学者だけのものではなかった。ランケは、かれの弟子であり文書館員でもあるカール・クリュップフェル（Karl Klüpfel, 1810—1894）に、解放戦争後に全土に簇生した歴史協会の実態調査と、それらの将来性にかんする答申をまとめるよう依頼した。歴史協会とは郷土の歴史の発掘と保存に関心をよせる素人の集団であり、またそういうふうにもまれてもいた⁽¹⁰⁾。したがって、ランケの弟子ゲオルク・ヴァイツ（Georg Waitz, 1813—1886）などは、歴史協会にたいするあからさまな敵意をかくさず、その簇生は歴史研究の進歩にとってかえって障害になると主張してはばからなかった⁽¹¹⁾。クリュップフェルの答申も歴史協会の将来性にかんしてはむしろ悲観的である。しかし、かれが論稿の冒頭で展開している現状認識は、社会変動のもたらしたインパクトと歴史熱のたかまりの関連をさぐろうとするわれわれの関心にとって重要である。

さっこの産業目標を推進するもろもろの学問のつぎに、げんざい歴史の研究がもっとも

熱心にいとなまれている。(中略)。それはあたかも精神が時代のますます急激になる変化、すべてを疑問視するその批判的な傾向にたいし、あらゆる変化の背後にある不変なるもの、発展の法則と帰結を知らんがために歴史という安全な地へ逃亡しているかのようである⁽¹²⁾。

ここからも当時の社会変動のインパクトがいかに大きなものであったかがわかる。このような証言はさらにふやすことができる。つまり、歴史にたいする関心のたかまりの背景に急激な社会変動の影響をみるという通説的な理解は、同時代人の言説によってもじゅうぶん正当化されるのである。

すでにふれたように、19世紀以降の人文科学者が熱意をかたむけたのは「救い、集める」ことであった。これにたいして、19世紀後半になって白熱する歴史主義論争において、批判者が一様に疑問視したのはこの「救い、集める」という方法の有効性であった。すなわち、それはいったいどれだけのものを「救い、集め」れば意味のある全体像をつかむことができるのかという疑問であり、さらに、そもそも「救い、集める」という手続は科学的認識のあるべきがたなのかという疑問にはかならない。学問的認識の極度な「實在論化」にたいする懷疑・不安といった要素が、来たるべき歴史主義論争の核心をなす問題なのである。

以上の考察より、われわれは通説的な理解の正当性を確認しえた。1800年当時の社会変動が学問的認識の「實在論化」にあたえたインパクトの大きさは、史料のうえでもじゅうぶん立証しうるのである。しかし、従来の説明は認識の「實在論化」の契機を提供するものではあっても、それを常態化させた要因を説明するものではない。歴史主義はそれがすでに克服されたと主張するものにとってもすくなくとも1960年代までは存続したのであり、その他のものにとってはそれはげんざいもまだ進行中のプロセスなのである。そうだとすれば、われわれは歴史主義的な認識手続を学問的認識の主流に押しあげた契機の説明だけで満足すべきではない。歴史主義が克服されなければならないものであるとするならば、むしろ、實在論的な認識手続を構造化させた要因こそが問われるべきであろう。この要因をさぐるためには、社会変動よりも学問研究自体の変化に目をむけなければならない。学問研究自身のありかたも、このころ大きな曲り角にあったのである。

(1) かかる理解に先べんをつけたのはゲオルク・フォン・ベロウとおもわれる。von Below, Georg, *Die deutsche Geschichtsschreibung von den Befreiungskriegen bis zu unsern Tagen. Geschichtsschreibung und Geschichtsauffassung*, Leipzig 1916.

(2) Troeltsch, a. a. O., S.9ff.邦訳は、『諸問題(上)』, 26頁以下。

(3) Rüsen, Jörn und Jaeger, Friedrich, *Geschichte des Historismus*, München 1992, S.6.

(4) Meinecke, Friedrich, Ernst Troeltsch und das Problem des Historismus(1923), wieder abgedruckt in: Ders., *Zur Theorie und Philosophie der Geschichte, Werke*, Bd.

- 4, Stuttgart 1959, S.367ff.とくに, S.371 und S.377.
- (5) Nipperdey, Thomas, *Deutsche Geschichte 1800–1866. Bürgerwelt und starker Staat*, München 1993⁶, S.484.
- (6) *Ebd.*, S.498ff.
- (7) Muhlack, Ulrich, *Geschichtswissenschaft im Humanismus und in der Aufklärung. Die Vorgeschichte des Historismus*, München 1991, S.417.
- (8) Steig, Reinhold, Jakob Grimms Plan zu einem Altdeutschen Sammler, in: *Zs. d. Vereins f. Volkskunde* 12, 1902, S.129 - 138.
引用は, 133f. なお, 歴史主義問題にしめるヤーコプ・グリムの位置については, Wyss, Ulrich, *Die wilde Philologie. Jacob Grimm und der Historismus*, München 1979.
- (9) Haupt, Moritz, Vorwort zum ersten Hefte, in: *ZdA* 1, 1842, o.S.
- (10) クリュップフェルの論稿と19世紀前半の歴史協会の活動については, 山田欣吾『西洋中世国制史の研究Ⅱ 国家そして社会—地域史の視点—』創文社, 1992年, 343頁以下。
- (11) Waitz, Georg, Falsche Richtungen. Schreiben an den Herausgeber, in: *HZ* 1, 1859, S.17ff.とくに, S.20f.
- (12) Klüpfel, Karl, Die historischen Vereine und Zeitschriften Deutschlands, in: *ZfGW*. 1, 1844, S.518ff.引用は, S.518.

3. ロマンなきロマン主義—学問の「専門職化」—

19世紀は学術活動そのものにとっても大きな節目となる時期であった。ニッパーダイは19世紀の世界史的な事件のひとつとして「生活や世界を変革する一大勢力への科学のいちじるしい躍進」をあげている⁽¹⁾。しかし, すべての科学が均等な速度で「一大勢力」に躍進したわけではない。この過程をまず最初に, しかも目にみえるかたちで体験したのは, おなじ哲学部内でも文化諸科学ではなく自然諸科学であった。19世紀後半の著名な文学者ヴィルヘルム・シェラー (Wilhelm Scherer, 1841—1886) は, 自然科学を「われわれすべてを魅了する凱旋車上の将軍」とたたえた⁽²⁾。また, マックス・ヴェーバーも「職業としての学問」(1917年) と題する有名な講演のなかで, 「医学や自然科学系統の大きな研究所」を「『国家資本主義的』な企業」にたとえている⁽³⁾。19世紀後半以降顕著になるのはまさしくこの自然諸科学の飛躍的な発展であった。

19世紀の自然科学の特徴はその実証主義的な思考のなかにある。この実証主義的な自然科学をもっとも印象的に具現したのが, 医学者, 医師, 社会改革者であり, また政治家でもあるルドルフ・フィルヒョウ (Rudolf Virchow, 1821—1902) であった。フィルヒョウによれば, 現実とは単に「経験される」のみであり, それにしたがって, すべての認識は自然の性質や世界の性質を客観的に再現することができる経験的な観察からのみ生じるという。「たえずくりかえされる具象的な観察」が, この観察によっていよいよ「正確に」根拠づけられる自然の「永遠の法則」の認識をもたらす。フィルヒョウの想定によれば, 「人類のすべての進歩」はそ

れにもとづき、また「唯一それなのに」もとづく⁽⁴⁾。実証主義は自然にかんする真の認識を獲得できると主張する。また、実証主義的な科学だけが唯一人類の進歩をもたらすことができると主張する。ここには、科学が「生活や世界を変革する一大勢力」になったことにたいする自然科学者の自負がこめられている。フィルヒョウは、1865年の「ドイツの自然科学者と医師の会議」で、「科学はいまや宗教になった」と宣言している⁽⁵⁾。また、1873年にはおなじ会議の席上で同様の趣旨からつぎのような発言をおこなっている。

われわれもひとつの信仰をもっている。それは真理の認識における進歩にたいする信仰である⁽⁶⁾。

実証主義的な自然科学はふたつの要求をかかげる。ひとつは自然という現実を再現することが可能であるという要求であり、いまひとつは、その成果が恒常的な進歩という観点から人間の生をよりよく変革することができ、それゆえに普遍的な意義をもちうるという要求である。実証主義的・客観主義的な自然科学の要求は、歴史家のあいだにもおそらくはそれと意識することなく共有されていた。「それがほんらいいかにあったか」をしめすことができるというランケの有名なことばにみられるように、歴史的に生起した現実を模写し、再現することができるという想定の下にそれはあらわれている。

自然科学の離陸はすでに19世紀前半には決定的になっていた。ロマンティカーたちもおなじ哲学部内の自然諸科学の発展につよく圧迫されているのを感じていた。当時のロマンティカーが感じた脅威を理解するために、ここではヤーコブ・グリムが1846年のゲルマニステン会議でおこなった「不明朗な学問 *ungenau* Wissenschaften の価値について」と題する講演をとりあげることにする。むろん、かれのいう「不明朗な学問」とは文化諸科学のことである。

不明朗な学問はいたく静かであり、同時にいたく不振にあえいでいる。各人が所有するものをドイツの歴史に、あるいはドイツ語の調査につよくむすびつけるにはその設備はあまりにも貧弱である。いっぽう、われわれは時代精神というものに無意識に反応する若者たちで、化学者や物理学者の講義室があふれんばかりであるのを眼のあたりにしている⁽⁷⁾。

すでに19世紀の前半には「不明朗な学問」は「明朗な学問」の加速度的な発展を脅威と感じており、「時代精神」にとりのこされることにたいする不安に悩まされていた。「不明朗な学問」は「明朗な学問」にすこしでも近づかなければならないという課題をかかえていた。そこでとられた対応が例の「救い、集める」であった。「救い、集め」、そして史料批判という一定の手続にもとづいて史実を確定するという歴史学の認識手続は、自然諸科学の観察を模した方法と

かんがえられたのである。

ここで注目しておかなければならないことは、19世紀前半に活動した歴史的諸科学の代表者たちが、実証主義的な自然科学の認識手続を自分たちのものにしようとかんがえていたことである。歴史科学と自然科学の認識手続の異同をめぐる考察は、のちの歴史主義論争においても核心をなす問題のひとつと理解された。その「反時代的考察」において「歴史の功罪」をあばきたてるニーチェは、「歴史学」は「たとえば数学とはちがって、けっして純粋科学とはなりえない」ことを指摘する⁽⁸⁾。また、ディルタイは、「社会と歴史の研究のための基礎づけ」をあたえようとする考察のなかで、かれ自身が命名者となった「精神科学Geisteswissenschaftenの認識方法」は、「自然科学の認識方法とはまったくことなるものである」と主張する⁽⁹⁾。ディルタイによれば、「(精神科学)においては理解Verstehenのなかに精神的な対象が生まれ、(自然科学)においては認識Erkennenのなかに物的な対象が生まれる」⁽¹⁰⁾。いっぽう、新カント派の哲学者であるヴェーバーは、「精神科学」と自然科学の認識方法の異質性を出発点とするディルタイのたちばをしりぞけ、みずからの提唱する「文化科学」Kulturwissenschaftenと自然科学の認識方法の同質性をむしろ前提とする。ヴェーバーにとって、科学が対象とする現象世界は無限の奥行きをそなえるものであり、したがって科学もほんらいは無限の可能性を秘めることになる。しかし、いっぽうで科学は人間の創造物であるがゆえにその有限性をはじめから宿命づけられてもいる。このディレンマは、「文化科学」が自然科学かを問わず、すべての科学を拘束するものであり、そこにヴェーバーはふたつの科学の共通性をみようとするのである⁽¹¹⁾。したがって、ヴェーバーが前提とするふたつの科学の同質性は、実在論者が両者のあいだに想定する同質性とは決定的にことなることになる。そのちがいをひとことでいうならば、実在論者がふたつの科学の可能性のなかに両者の共通点をつくりだそうとするのにたいして、ヴェーバーはふたつの科学を拘束している限界に両者の共通性があるとかんがえるのである。ここではこれ以上くわしくふれることはできないが、19世紀前半の歴史的諸科学の代表者たちが、歴史学は実証主義的な自然科学の認識方法を模倣しようとかんがえたということを議論の出発点としてまいちど確認しておくことにしたい。

そもそもグリムがすでに紹介した古俗収集者のためのマニュアルを作成しようとしたのも、みずからの学問分野から「アマチュアリズム」を排斥しようとしたことであり、それは「明朗な学問」に近づくための処方と理解されていた⁽¹²⁾。また、ランケの依頼で執筆されたクリュップフェルの論稿も、やはり「アマチュアリズム」の排除という問題をつよく意識していたのである⁽¹³⁾。「アマチュアリズム」の克服という問題も、「明朗な学問」に近づくことを意識する当時の文化諸科学の代表者にとって重要な課題と認識されていた。「アマチュアリズム」を排除するために、研究活動に従事しようとするものの資格認定基準もじょじょに厳格化・一本化されていく。文化諸科学も19世紀の経過のなかで一定の「専門職化」を体験した。19世紀中葉以

降大学で教鞭をとるものの資格を認定するために、博士論文・教授資格論文の審査という二段階選抜のシステムが一般化し、さらに研究職につくまでの学徒の生活を保証するために研究協力者制度も普及していく⁽¹⁴⁾。しかし、資格認定基準の厳格化・一本化とはいっても、この領域でもやはり文化諸科学には一種の「不明朗さ」がつきまといざるをえなかった。歴史家の多くが歴史家になるための必要条件として「直観」をあげているのがそのよい例である。ただし、この「直観」はおそわって習得できるといったたぐいのものではなく、それは当人の「天分」によって決定されているという。しかし、資格の認定基準をすこしでも客観化するためには、「直観」の「直観」による選抜にたよっているわけにはいかない。そこで、後天的な要因、すなわち学習によって習得できる技術が注目されたのである。この技術というのが「史料批判」にはかならない。歴史家は後進に「直観」をおしえることはできないが、「史料批判」という技術ならば伝授することができるとかんがえられた⁽¹⁵⁾。この「史料批判」をドイツの歴史研究における一種のカノンの地位にまでたかめたのがゲオルク・ヴァイツである。かれは中世史料集成（モヌメンタ）の仕事を指揮し、みずからの弟子に研究協力者のポストを積極的に斡旋することによって、その後のドイツ中世史研究のありかたをつよく方向づけた⁽¹⁶⁾。まず、研究をころざすものは自分のテーマに関連するとおもわれる史料を網羅的に収集する。つぎに、厳密な「史料批判」にもとづき史実の確定がおこなわれる。さいごに、それを叙述するさいには、できるかぎり「史料にのみ語らせる」のがよいとかんがえられたのである⁽¹⁷⁾。かかる研究手順は中世史研究のみならず近代史研究にもすくなからぬ影響をおよぼしていた。では、なにゆえ「史料批判」を自己目的とするような研究スタイルが、ドイツの歴史研究において一種のパラダイムとよべるような地位を獲得するにいたったのであろうか。

すでにふれたように、19世紀中葉以降大学で教鞭をとるものの資格を認定するためにドイツ特有の二段階選抜のしくみが定着していく。そのために研究職をころざすものが大学に招へいされるまでの準備期間もいきおいながくならざるをえなかった。ドイツにおいては大学教授が他の専門職とくらべてもとくにたかいステイタスを享受できた一因がここにある。しかし、待機期間ながいということは、研究職をころざすものにとってひじょうに重い負担と感じられたにちがいない。たしかに、待機期間の圧迫を緩和するために研究協力者職の導入がすすめられはしたが、その収入はけっして生計をたてるにじゅうぶんといえるようなものではなかった。したがって、学究生活をころざすものにとって、この待機期間をどれだけ短縮できるかは人生設計のうえでも重大な関心事であった。そのさい、すでにふれた研究スタイルはこのような欲求を満たすためにもっとも適合的であるとかんがえられたのである。すでに確認しておいたように、歴史主義的な諸潮流の特徴は歴史を構成するさいのみずからの観点の有効性を疑問視しないことにあった。なかでも19世紀後半以降いきおいをます些末実証主義的な方向は、おのれの観点の存在自体を否認するにいたる。みずからの観点の有効性を云々するよりも、手

垢にまみれていないオリジナルな史料を探索し、厳密な「史料批判」をへたのちに「史料にのみ語らせる」ほうが、はるかに手堅く業績をあげるリスクのすくない方法とかがえられたのである。げんざいにいたるまでドイツの大学における歴史教育のありかたをつよく規定する研究手順は、研究者自身によって内面化されたものとおもわれる。ロマンティカーたちの「救い、集める」ことにたいする情熱は、けっしてロマンティックな気分だけにつきうごかされていたわけではないのである。

業績志向のたかまりは、「史料批判」という技術をますますひとり歩きさせることになり、歴史認識論上の諸問題を歴史研究から欠落させるという事態を招いた。19世紀後半以降の歴史主義論争で問題になったのは、まさしく歴史的諸科学が敬遠したこれらの諸問題にほかならない。のちにヴェーバーが憂慮をこめて語ることになる「精神なき専門人」の支配する恐怖は⁽¹⁸⁾、「精神の貴族」がやすらう世界にも押しよせていたのである。すでに19世紀中葉には、このような事態の進行にたいする告発が歴史学内部からもあがっている。

「博学」の作品に終生ふかい侮蔑の念を抱きつづけた文化史家ブルクハルトは、安易な専門主義に流れる当時の歴史学の風潮を皮肉をまじえて批判する。

親愛なる主もときおりお戯れをなさる。主は、皇帝コンラート2世が1050年5月7日にゴスラーで厠に行ったかどうかを科学的につきとめれば、全世界を征服したかのような錯覚におちいる文献学者や歴史研究者の一群をつくりたもうた。

ブルクハルトがたとえ話をもちいて皮肉っているのは、まさしくここで問題にしている些末実証主義的な傾向にほかなるまい。ブルクハルトは史実の確定がそれだけで尊重される当時の歴史学の風潮に異議を申したてているのである。さらに、かれは史実を根拠づける基準のあいまいさをも冷笑する。

声高に正しいとさげばれ、よく探求しつくされたもろもろの事実を配列したところで、いぜんとしてなお真理、すなわち史実という印象をつくらないということを、そもそもどのくらいの人たちが理解しているのだろうか。

ブルクハルトはのちに沸騰する歴史主義論争の核心をなす歴史認識の「客観性」にかんする議論をすでに先取りしていた。ブルクハルトの告発は当時の歴史学界においてけっして孤立したものではなかった。ドロイゼンはすでに言及したモヌメンタの仕事を念頭におきつつ、「われわれの青年が訓練をつめばつむほど愚かになり、方法を身につければつけるほど空虚になる」ことをなげき、それを身につけたものが「モヌメンタのための工場労働Fabrikarbeitの専門家」

となる当時の歴史学界の現状を痛烈に批判している。ここでドロイゼンがつかっている「工場」および「工場労働者」という表現は、のちに大学や既成の学問を攻撃するものたちが好んでもちいることになる比喻である。さらに、ドロイゼンは、やはりモヌメンタの仕事をおもいうかべながら、それがわれわれを「いわゆる批判とよばれるものに埋没」させたところばし、その実態を告発している。

その芸当はたかく見つもっても年代記作家のなかのみじめな悪魔がほかから書きうつしたのではないかを調べるくらいである。（中略）。わたしは歴史家の任務は理解Verstehenであると主張したことがはやくも頭痛の種になっている⁽¹⁹⁾。

「歴史家の任務は理解である」という一節は、ドロイゼンが歴史認識論上の諸問題ととりくんだ『ヒストリーク』に由来する。ドロイゼンのいう「理解」とは、史実の確定という意味での理解とも、ディルタイのいう感情移入的な意味の理解ともことなるものであることはいうまでもない。

ブルクハルトやドロイゼンは歴史学の些末実証主義的な傾向にたいする明確な批判者であり、批判のトーンのたかさはかれらのかんがえる病弊がそれだけ進行していたことをしめしている。いっぽう、しばしばかかる傾向の推進者のひとりとみなされるランケの言説の変化のなかにも、われわれは歴史学の「専門職化」がもたらした研究手順の画一化という問題をうかがうことができるのである。しばしば指摘されるように、ランケは歴史認識論上の問題を体系的にあつかうことはしなかった。しかし、個々の著作に付された序言や書簡のなかで、かれはおりにふれて認識論上の問題をとりあげていた。それによると、部分と全体、個別と普遍、有限と無限の関係をめぐる考察は、すくなくとも初期のランケにとっては無視しがたい関心事であったことがわかる。弟ハインリヒにあてた1820年の書簡のなかでランケは多少の自負をこめてつぎのように語っている。

あらゆる歴史のなかに神はやどり、また生きたまう。かくして、あらゆる歴史のなかに神を認識することができる。しかし、むろんわたしには歴史全体の大きな関連がみえている⁽²⁰⁾。

後世の歴史家が歴史主義の権化とみなすランケも、その活動の初期には部分と全体の関係という問題を視野においていた。草創期の歴史学科が哲学部内でたしかな地歩をきずけるかどうかが、ランケにとって一大関心事であった。そのさい、ヘーゲルの展開する歴史哲学が歴史研究者にとってひとつの大きな脅威と認識された⁽²¹⁾。したがって、ランケも部分と全体、個別と普遍、有限と無限の関係にかんする考察を回避するわけにはいかなかったのである。1830年代

の作とされる「普遍史の理念」という論稿のなかで、ランケはヘーゲル流の普遍史を意識しながら歴史学の任務をつぎのように意義づけている。

哲学者はおのれの領分から歴史を観察し、進行、発展、全体のなかに無限をさぐるのにたいして、歴史学はあらゆる実体のなかに無限を認識する⁽²²⁾。

ランケの有限と無限の関係にかんする考察は、一貫して有限のなかに無限をみるというちがいであった。つまり、ランケは歴史学が無限を認識できると想定していたのである。いっぽう、晩年になるにつれてしだいにランケの視界からは有限と無限の関係にかんする考察が欠落していく。ランケがライバル視したヘーゲルのすがたはもはやこの世にはなく、哲学内部でも「専門職化」の進展にともない、原典批判というかたちをとって「實在論的」な認識手続が浸透していく⁽²³⁾。ヘーゲル以降の哲学はランケが脅威と感じた方向には発展しなかったのである。それにともなってランケの言説から全体、普遍、無限といった要素がしだいにうすれていく。弟オットーにあてた1873年の書簡のなかで、歴史家の任務についてランケはつぎのようにのべている。

歴史家はすべての時代の意味をそれ自体のためにそれ自体として理解し、また理解することをまなぶために存在する。歴史家はあらゆる党派心をすて、おのれの対象そのものを凝視すべきであり、それ以外のなにものにも視線をむける必要はない⁽²⁴⁾。

「おのれの対象以外のなにものにも視線をむける必要はない」という晩年のランケのことは、「歴史全体の大きな関連」の探求をこころざすわかき日のランケのすがたのあいだには、まさしく隔世の感がある。これはたんに一歴史家の個人的な変節に帰せられるべき問題ではない。この間に歴史研究の主たる潮流も確実に変化していたのである。新ランケ派の代表的な歴史家であるマックス・レンツ（Max Lenz, 1850—1932）は、1860年代にはすでに歴史学界内部においてさえランケの著作をひもとくものはなかったと回顧している⁽²⁵⁾。つまり、ランケはその存命中にすでに史学史上の一人物と化しており、歴史学者としては過去の人になっていたのである。ランケの構想した「理念」の発現過程としての各国史の叙述がかえりみられることはもはやなかった。ランケのあたえたほんとうの影響とは、「歴史全体の大きな関連」がみえると豪語したわかき日のかれのすがたではなく、むしろ、専門職時代をむかえた学究生活に指針をしめす晩年のかれのすがたなのである。

ランケとともに有限のなかに無限を認識することに満足をみいだせなければ、いまひとつの方法がある。その方法とは、有限をつみかさねることによっていつの日か無限に到達できると

かんがえることである。この視点にたつならば、げんざい全体を把握できないとしても、それはまだ個別研究の絶対量がたりないからだということになり、研究手続の有効性自体が疑問視されることはない。しかし、いずれのたちばをとるとしても、それはわれわれのあつかう歴史という現象世界が有限存在であるという前提があってはじめて意味をもつにすぎない⁽²⁶⁾。この前提に同意しないもの、すなわち、われわれの対象とする歴史世界が無限の奥行きをそなえたものであるという前提にたつもの、その代表格であるヴェーバーの目には、かれらのすがたは「大きなこども」、「幸福をみつけた」、「さいごの人たち」としかうつらないのである⁽²⁷⁾。

すでに指摘したように、19世紀後半になって沸騰する歴史主義論争の核心は、学問的認識の極度の「实在論化」にたいする危惧にあった。そして、この实在論的な認識手続を構造化させた最大の要因は、19世紀以降に進展した学術活動の「専門職化」にあることがここでは確認できた。認識の「实在論化」が学問の「専門職化」と軌を一にしているとすれば、歴史主義論争であつかわれた問題は、「専門職」としての学問が存在するところならどこにでもあらわれる可能性がある。しかし、19世紀後半以降、とりわけ1920・30年代のドイツほどこの問題がつよく意識されたところはなかった。したがって、つぎのような問いをたててみる必要があるとなろう。すなわち、学問の「専門職化」がもたらした学問的認識の「实在論化」という問題が、なにゆえ、ドイツではこれほどつよく意識され、他の国々ではそれがドイツほど大きな問題とならなかったのか。この問題は大学における歴史教育のこんごのありかたをうらなううえでも重要な試金石をふくんでいる。この問いにこたえるためには、さまざまな国々における学術活動の「専門職化」の過程が比較・検討されなければなるまい。しかし、それはげんざいの筆者の力量をはるかにこえる問題である。

歴史主義の名で総称される学問の諸潮流の特徴は、歴史を構成するさいのみずからの観点の有効性を疑問視しない点にあった。そして、19世紀中葉以降は学問の「専門職化」の進行にともない、観点の介在自体を否認する些末実証主義が優勢をしめるにいたる。しかし、いずれの潮流も、「対象が認識を規定する」という「实在論」のたちばを共有している点で一致がみられた。また、認識の「实在論化」をもたらした要因が学問の「専門職化」であることも確認できた。そうだとするならば、そもそも歴史主義という閉塞状況から脱出する可能性は存在するのであろうか。存在するとするならば、それはどのような方向にひらけているのであろうか。この問題をかんがえるために、ここでは歴史主義問題を学問の「専門職化」との関連で考察したふたりの思索家の議論が問題史の視点から検討される。そのふたりとは、フリードリヒ・ニーチェとマックス・ヴェーバーである。ふたりの歴史主義問題にたいする解答を吟味することは、歴史主義批判の系譜という観点からも意味をもつ。なぜなら、ふたりの解答は、トレルチュが歴史主義に対抗する二大思潮とよぶ「生を直観する人」（生の哲学者）と「形式の思考者」（新カント主義者）を代表するものだからである⁽²⁸⁾。

- (1) Nipperdey, *a.a.O.*, S.484.
- (2) 引用は以下の文献によった。Reiß, Gunter(Hg.), *Materialien zur Ideologieggeschichte der deutschen Literaturwissenschaft. Vom Wilhelm Scherer bis 1945*, Bd.1: *Von Scherer bis zum Ersten Weltkrieg*, Tübingen 1973, S.XXIV.
- (3) Weber, Max, *Wissenschaft als Beruf* (1919), wieder abgedruckt in: Winckelmann, Johannes(Hg.), *Max Weber. Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen 1968³, S.584.邦訳は, 出口勇蔵訳「職業としての学問」『ウェーバー 宗教・社会論集』河出書房新社, 1988年, 363頁。
- (4) フィルヒョウにかんする以上の引用は, 以下の文献によった。Schipperges, H., *Utopien der Medizin. Geschichte und Kritik der ärztlichen Ideologie des 19.Jahrhunderts*, Salzburg 1968, S.36.
- (5) *Ebd.*, S.107.
- (6) *Ebd.*, S.114.
- (7) Grimm, Jacob, Über den Werth der ungenauen Wissenschaften, in: *Verhandlungen der Germanisten zu Frankfurt am Main am 24., 25. und 26. sept. 1846*, Frankfurt a. M., S.59f.
- (8) Nietzsche, Friedrich, Vom Nutzen und Nachteil der Historie für das Leben(1874),in: *Nietzsche Werke. Kritische Gesamtausgabe* III/1, hg.v.Colli, Giorgio und Montinari, Mazzino, Berlin 1988², S.243ff. 引用は, S.257.邦訳は, 大内了義訳「生に対する歴史の功罪」『ニーチェ全集 第二巻 (第I期)』白水社, 1980年, 113頁以下。引用は, 128頁。
- (9) Dilthey, Wilhelm, *Einleitung in die Geisteswissenschaften*(1883), in: *Ders., Gesammelte Schriften*, Bd.1, Leipzig 1922², S.119f.邦訳は, 山本英一／上田武訳『精神科学序説 社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み (上)』以文社, 1981年, 151頁。
- (10) Dilthey, *Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften*(1910), in: *Ders., Gesammelte Schriften*. Bd.7, Göttingen 1927², S.86.
- (11) Weber, Max, Die Objektivität sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis(1904), wieder abgedruckt in: Winckelmann, Johannes(Hg.), *a.a.O.*, S.172ff.出口勇蔵訳「社会科学および社会政策の認識の「客観性」」『ウェーバー 政治・社会論集』河出書房新社, 1988年, 75頁。
- (12) Steig, *a.a.O.*, S. 133ff.
- (13) Klüpfel, *a.a.O.*, S. 547.
- (14) 望田幸男「大学教授の資格制度と機能」(望田幸男編)『近代ドイツ＝「資格社会」の制度と機能』名古屋大学出版会, 1995年, 47頁以下。
- (15) Weber, Wolfgang, *Priester der Klio. Historisch - sozialwissenschaftliche Studien zur Herkunft und Karriere deutscher Historiker und zur Geschichte der Geschichtswissenschaft 1800-1970*, Frankfurt a.M 1984, S.323f.
- (16) ゲオルク・ヴァイツの学派形成については, *Ebd.*, S.223f.
- (17) Ranke, *Englische Geschichte vornehmlich im 17.Jahrhundert*, Bd.2 (*Sämtliche Werke*, Bd.15), Leipzig 1877, S.103.
- (18) 阿部行蔵訳「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」」『ウェーバー 政治・社会論集』河出書房新社, 1988年, 234頁。

- (19) 以上のブルクハルトとドロイゼンからの引用は、以下の文献によった。Fuhrmann, Horst, Gelehrtenleben. Über die Monumenta Germaniae Historica und ihre Mitarbeiter, in: DA 50 Jg., 1994, S.1ff.引用は, S.6f.
- (20) Fuchs, Walther P.(Hg.), *Leopold von Ranke. Das Briefwerk*, Hamburg 1949, S.16ff. 引用は, S.18.
- (21) Rothacker, Erich, Savigny, Grimm, Ranke. Ein Beitrag zur Frage nach dem Zusammenhang der Historischen Schule, in: HZ 128, 1923, S.413ff.とくに, S.418.
- (22) Ranke, Idee, S.295.
- (23) Haag, Karl H., *Der Fortschritt in der Philosophie*, Frankfurt a.M. 1985, S.134ff.
- (24) Fuchs(Hg.), *a.a.O.*, S.518ff.引用は, S.518.
- (25) Rachfahl, Felix, Max Lenz und die deutsche Geschichtswissenschaft. Zu seinem 70. Geburtstage, in: HZ 123, S.189ff.とくに, S.203.
- (26) 有限と無限の対話の可能性という観点から歴史主義問題を考察するものとして, Oexle, *a.a.O.*, S.17ff.
- (27) Weber, *Wissenschaft*, S.598.出口訳, 376頁。
- (28) Troeltsch, *a.a.O.*, S.686.邦訳は、『諸問題（下）』, 322頁。

Ⅲ 歴史主義批判の系譜

1. ニーチェ—生の哲学—

歴史主義論争の歴史のなかで、ニーチェの論稿『生にたいする歴史の功罪』（1874年）がおよぼしたインパクトを無視することはできない。たしかに、ニーチェはこの論稿のなかで「歴史主義」という概念をいちどもつかってはいない。おそらくは、このことがこの論稿の意義がしばしばみすごされてきたことの原因とおもわれる。しかし、ニーチェは、のちにトレルチュによって明確な定義をあたえられることになる問題のすべてを、この論稿のなかですでに先取りしていたのである。

そのさい、科学と生の関係をいかにさだめるかがニーチェの最大の関心事であった。ニーチェは近代科学が生におよぼすとかがえられる脅威を認識し、そこから「生が認識と科学を支配すべきなのか、それとも認識が生を支配すべきなのか」というかれの考察の中心的な問いをたてる。

両者のうちどちらの威力がよりたかくより決定的なものなのか。何人もうたがうまい、生こそよりたかい支配する威力だ。なぜなら、認識が生を絶滅させるなら、認識とともに絶滅するだろうから。認識は生を前提とする、つまり認識は生を維持するために、あらゆる生きものが自分の生存の継続に抱くのとおなじ関心を抱くのだ⁽¹⁾。

すでにみたように、フィルヒョウは「科学はいまや宗教になった」と豪語した。また、ランケはしばしば歴史家を神の意志をつたえる「神官」にたとえた⁽²⁾。19世紀科学の主たる潮流の代表者たちは、ニーチェの問いにたいして暗黙のうちに生にたいする科学の支配を前提していたといえる。これにたいして、ニーチェはそれとはまったく正反対のたちばをとるのである。

問題の論稿の序文において、ニーチェはかれの考察がなによえ「反時代的」なのかを説明している。それは、「時代が正当にも誇りとしているもの、つまり歴史的教養を、ここでいちど時代の害毒、虚弱、欠陥として理解しようとする」からである。また、ニーチェは歴史的教養が無批判に尊重されるような時代の風潮を「いのちの歴史熱病」とよんでもいる。むろん、ニーチェも歴史の必要性を全面的に否定するわけではない。しかし、ニーチェにとって「歴史が必要なのは、生のため、行為のため」であり、あくまでも「歴史学が生に奉仕するかぎりにおいて」なのである。「ところが、生を萎縮させ退化させるような歴史研究のどあいが存在し、またそのような歴史尊重が存在する」とニーチェはみる。そして、これは「ここ二世代ドイツ人のあいだにはっきりみとめられる」傾向であるという⁽³⁾。かかる歴史学が生にたいしておよぼす害毒は、ニーチェによればそれが科学たらんとするということにある。なぜなら、「純粹科学とかんがえられ至上権をあたえられた歴史学は人類にとって一種の生の終結であり決算だといえる」からである。したがって、「歴史学はそれが生に奉仕するかぎりにおいて非歴史的な力に奉仕するのであって、このような従属関係にあっては、たとえば数学とはちがって、けっして純粹科学とはなりえないし、またなるべきでもない」⁽⁴⁾。

ニーチェの理解するところでは、科学としての歴史学は以下の三点で生をおびやかす「病」となる。

- (1) 科学としての歴史学はたえずあたらしい認識や事実をもたらすが、もはやそれらをひとつに関連づけることができない。「未知なるもの、脈絡のないものが押しよせてきて、記憶のとびらを全開にしてもまだ足りない、人間の天性はこれらの客人を迎えいれ、整え、尊敬しようと全力をつくすが、そもそも客人同士がおたがいに争っており、この争いに巻きこまれて自滅しないためには、それらすべてを抑制し、清算することが必要となる」⁽⁵⁾。かかる歴史の飽食によって、「時代は自分自身に皮肉に対するという危険な気分陥り、それによってもっと危険な嘲笑主義の気分陥る」。そして、かかる歴史的教養は、「生の諸力を萎縮させ、ついに破壊してしまう」がゆえに危険とされる⁽⁶⁾。ここでニーチェが指摘しているのは、歴史学の些末実証主義的な傾向がもたらす諸問題にほかならない。
- (2) 第二の危険は、科学としての歴史学が「客観性」を要求することに存する。しかし、この自称「客観性」とは、ニーチェによれば、じつのところは「永遠の無主体性」以外のなにものでもない。かくして、歴史家という「おぞましき種族」は、受動的な写生、模写、写真撮影に満足をみいだす「認識のつめたいデーモン」とであるとされる⁽⁷⁾。歴史学が前提とする

「客観性」にたいするニーチェの攻撃は、1860年のランケの有名な一節をおもいださせる。「わたしはわたしの自我を滅却し、事実のみ語らせ、支配的な諸力をうかびあがらせるようにとめた」⁽⁸⁾。ニーチェはかかる「客観性」にたいする要求を「ひとつの幻想」、「拙劣な神話」としてしりぞけるのである⁽⁹⁾。

- (3) 科学としての歴史学のほんとうの危険性をニーチェはこの第三の要因にみる。それは歴史認識が無限という性格を有する点にもとめられる。歴史学が無限という性格を有するのは、それがあらゆるものを歴史的発展の構成要素としてしめすからである。ニーチェは科学としての歴史学を「普遍的な生成の学」とよぶ⁽¹⁰⁾。すなわち、それはすべてを生成とそれとともに消滅という観点から考察する。その必然的な帰結は、この学がなにものをも生産しないということであり、そればかりか「絶望と懷疑をもたらす際限のなさ」だけをうみだしかねないということである⁽¹¹⁾。そして、これは、「歴史は科学たるべしという要求」の避けがたい帰結であるとされる。なぜなら、ニーチェによれば、科学としての歴史学は、「生成したもの、歴史的なるものばかりを注視し、存在するもの、永遠なるものをけっしてみようとしない」からで、それゆえ「人間を認識された生成流転の無限・無限定の光波の海に投げこもうとするから」である⁽¹²⁾。ニーチェはこの点をキリスト教とそれにかんする歴史研究の歴史によって例示しようとする。ニーチェによれば、キリスト教を歴史的な観点からとりあつかう神学は、キリスト教を「キリスト教にかんする純粋な知識に解消し、それによってキリスト教を破滅させる」⁽¹³⁾。ここではキリスト教を例にとりつつ、価値問題一般が考察の対象とされている。すなわち、「普遍的な生成の学」としての歴史学は、あらゆる価値を終始一貫して歴史化にさらし、それによってこれらの価値を破滅させるということが問題視されているのである。

以上で、ニーチェが歴史を尊重する時代風潮を「いのちのりの歴史熱病」とかんがえる理由を要約した。ニーチェの考察のなかで、のちに科学の問題として議論される歴史主義と、生をおびやかす脅威とかんがえられる歴史主義とがわかちがたくむすびついていたことがわかる。そして、このことが、みずからの投じた問題にたいするニーチェ自身の解答をもつよく規定することになるのである。ニーチェは「歴史の病」にたいしてふたつの対抗措置を提案する。ひとつは歴史的なるものを厳格に制限することであり、いまひとつは歴史は科学たることをやめべしという要求である。そして、まず、歴史的なるものの制限のために、ふたつの方策―「非歴史的なるもの」と「超歴史的なるもの」―がしめされる。「非歴史的なるもの」とは、忘却、すなわち「わすれることができる技術および力」である。いっぽう、「超歴史的なるもの」とは、「生成から視線をそらす力」、「永遠なるもの」に目をむける力であり、これらの力とは「芸術」と「宗教」にはかならない⁽¹⁴⁾。それでも歴史はいぜんとしてのこる。ここにニーチェの第二の要求がうまれる。歴史学は生に奉仕するために、科学たるべきことをやめなければな

らないという要求である。「記念碑的歴史」として、歴史学は「模範をしめし、教えをたれ、慰めをあたえてくれる人」をしめすことによって奉仕する⁽¹⁵⁾。「骨董的歴史」として、歴史学は「保存し、尊敬するもの」に奉仕する⁽¹⁶⁾。さいごに、「批判的歴史」として、歴史学は「過去を粉碎し、解体する」ことによって生に奉仕する⁽¹⁷⁾。ここで重要なことは、しばしばみおとされがちなのだが、ニーチェのいう「記念碑的歴史」、「骨董的歴史」、「批判的歴史」が、もはや科学としての性格を有するものではないとされていることである。

ニーチェは、かれのかんがえる科学の自己矛盾とそれが生におよぼす悪影響とを切っても切れないものとして理解する。したがって、科学の自浄能力に期待がもてないならば、生を救済するために科学の放棄という決断をくださざるをえなくなる。具体的にはそれは歴史は科学たることをやめるべしという要求となってあらわれた。つまり、ニーチェは生と科学の関係をめぐるディレンマを、科学の局外に身をおくことによって解決しようとするのである。かかる姿勢は科学の「専門職化」にたいするニーチェの態度をもつよく規定することになった。そして、ニーチェは科学の自浄能力に期待がもてない理由を、科学の「専門職化」がもたらす弊害のなかにみているのである。

どうかわたしのいうことを信じてくれ。人間を成熟させるまえに、科学の工場で働かせ、役にたつようにしようとすれば、あまりにも小さいうちから工場で働かされるわかい奴隷とおなじように、科学もまたまもなく破滅してしまうのだ。それ自身功利とは関係なく、生活問題からは離れてかんがえられる諸関係をいいあらわすのに、奴隷保有者や雇用者の特殊な用語をつかわなければならないのは遺憾とするところだ。しかし、もっともわかい学者世代の状態をえがこうとすると、「工場、労働市場、供給、実用化」など—その他エゴイズムの助動詞がどのようなものであれ—そうしたことばがどうしても口をついてでてきてしまうのだ⁽¹⁸⁾。

歴史研究の現場を「工場」にたとえる比喻を、われわれはすでにドロイゼンの言説のなかにもみた。19世紀半ばに本格化する学術市場の拡張にともない、歴史研究は個人的にいとまれれる職人仕事の域をはなれ、着実に「ビジネス化」の道をあゆんでいたのである。さらに、ニーチェは科学の「ビジネス化」がもたらす弊害をはげしく糾弾する。

飽きもせずに「分業！整列！」という近代的な戦闘殺戮用の号令をかけている人たちには、いちどきっぱりこういつてやらなければならない。きみたちが科学をできるだけはやく促進させようとすれば、同時に科学をできるだけはやく滅亡させることにもなるぞ。牝鶏にあまりにもはやく卵をうませようと強制すれば、牝鶏そのものがくたばってしまうのとおなじこ

とだ。よろしい、たしかに科学は最近の数十年間におどろくほどはやく進歩した。だがきみたち、いちど学者のつらをとくとみてみたまえ。このつかれはてた牝鶏のつらを。連中は「調和のとれた人士」などではぜんぜんない。いままで以上にやかましくなき声をあげるだけだ。それもいままで以上にひんぱんに卵をうむからというだけの話だ。とはいえ、もちろん卵はいよいよ小さく（書く本はいよいよ厚くなるが）なってきた⁽¹⁹⁾。

ニーチェは、科学の「専門職化」が科学的な認識手続に画一化を強要しているとかがえた。ここでニーチェが憂慮しているのは、科学的認識の「硬直化」という問題にほかなるまい。これにたいしてニーチェはふたつの対抗措置を提案している。

第一に、かれは科学的認識の生にたいする従属を要求し、科学を監視するために科学のかたわらに「生の衛生学」がおかれるべきことを主張する⁽²⁰⁾。つまり、ニーチェは科学自身には教養の「硬直化」を救う可能性をまったくみとめないのである。そして、そこから第二の要求がうまれる。かれは科学ではなく「芸術」や「宗教」に期待をよせるのである。むろん、それは官僚化した御用芸術や御用宗教でないことはいまでもない。ここでは、芸術家や宗教家のメンタリティーが、科学のもたらす認識の「硬直化」にたいする一種の「解毒剤」としてはたらくことがばくぜんと期待されているといってよかろう。また、ニーチェがこの考察をしめくくるにあたって、「歴史的教養が放埒無道にふるまう時代」を「壮年」、「老年」にたとえ、それに「青春」、「青年」、「若者」を対峙しているのもおなじ姿勢からであるとかんがえてまちがいない⁽²¹⁾。つまり、ニーチェは、科学の「専門職化」とそれがもたらす教養の「硬直化」に断固たる拒否の態度でのぞむのである。

ニーチェは、科学のかかえる自己矛盾とそれが生におよぼす脅威とを同一の問題ととらえ、それらに対処するためにひとつの解答を用意しようとした。結果的に、その考察は科学の専門性の放棄という結論に逢着せざるをえなかった。ニーチェは、ヴェーバーいうところの「大きなこども」を、「小さなこども」というポーズで挑発しようとした感がどうしてもぬぐえないのである。

以上でニーチェの議論の概要をつかむことができた。つぎに、ニーチェの考察の問題点をわたしなりにまとめてみたい。要約すればそれは以下の三点になる。

- (1) 科学のかかえる自己矛盾と、生をおびやかす病というふたつの問題領域の内的連関をさぐりあてたことは、まさしくニーチェのけい眼であった。しかし、科学と生がことなる原理にもとづく自律的な領域であることもまたみとめられてしかるべきであろう。したがって、問題にたいして解答をかんがえるさいには、両者をいったんわけて考察するという、すでに紹介したオットー・ヒンツェの提言にならうのがよかろうとおもわれる。この線にそって、以下にのこりふたつの問題を指摘する。

(2) まず、生をおびやかす脅威と理解される歴史主義問題にたいして、ニーチェは認識および科学にたいする生の支配をもって応じようとした。そのさい、生がほろべば認識もまたほろぶというのがニーチェのあげる理由であった。しかし、われわれは、生は認識されてはじめて生たりうるという側面もみのがすべきではなかろう。このことをみとめるならば、科学と生の関係は支配・従属といった観点から議論されるべきたぐいのものではなく、むしろ両者は相互補完的な関係にたつことになる。科学と生の関係にかんするニーチェの考察にはこの点が欠落している。

(3) 科学のかかえる最大の自己矛盾を、ニーチェはそれがカノンとしている「客観性」を根拠づける基準のあいまいさにみえていた。当時の科学の主潮流が前提とする「客観性」を、ニーチェは「永遠の無主体性」としてしりぞけた。しかし、ほんとうの問題は歴史研究が没価値的にいとなまれることにあるわけではない。すべての歴史研究が特定の前提のもとに構成されており、その前提はなんらかの価値をふくんでいる。没価値的に歴史研究をおこなうことができるのかんがえるものは、みずからの前提としている価値を永久に対象化することはできない。そこにこそほんとうの問題が存在するのである。

以上の三つの問題点を視野におさめながら、ニーチェの投じた問題に、ニーチェとはことなる地平でこたえようとしたのが、じつはつぎに考察するマックス・ヴェーバーなのである。

(1) Nietzsche, a.a.O., S.330f.邦訳は、209頁。

(2) この点にかんしては、Weber, Wolfgang, a.a.O., S.326ff.

(3) Nietzsche, a.a.O., S.245ff.邦訳は、115頁以下。

(4) Ebd., S.257.邦訳は、128頁。

(5) Ebd., S.272.邦訳は、144頁。

(6) Ebd., S.279.邦訳は、151頁以下。

(7) Ebd., S.284ff.邦訳は、157頁以下。

(8) von Ranke, *Englische Geschichte*, Bd.2 (1860), *Sämtliche Werke, Zweite Gesamtausgabe*, Bd.15, S.103.

(9) Nietzsche, a.a.O., S.289f.邦訳は、163頁。

(10) Ebd., S.272.邦訳は、144頁。

(11) Ebd., S.324.邦訳は、202頁。

(12) Ebd., S.330.邦訳は、208頁以下。

(13) Ebd., S.297.邦訳は、172頁。

(14) Ebd., S.330.邦訳は、208頁。

(15) Ebd., S.258.邦訳は、129頁。

(16) Ebd., S.265.邦訳は、136頁以下。

(17) Ebd., S.269.邦訳は、141頁。

(18) Ebd., S.300f.邦訳は、175頁。

(19) Ebd., S.301.邦訳は、176頁。

(20) Ebd., S.331.邦訳は、209頁。

(21) Ebd., S.322ff.邦訳は、200頁以下。

2. ヴェーバー (1) —ニーチェ問題にたいする解答—

マックス・ヴェーバーがニーチェの投じた諸問題に多大な刺激をうけていたことは、近年ますますさかんに指摘されているところである⁽¹⁾。わが国においても山之内靖氏がいちはやくかかるヴェーバー研究の新動向に注目し、氏自身のオリジナルな研究成果もまじえ、われわれのヴェーバー理解にあたたかな地平をひらいてくれた⁽²⁾。わたしもかかる研究動向が実りある成果をもたらすであろうことを確信している。しかし、在来の研究にまったく異議なしというわけではない。既往研究はニーチェとヴェーバーのとらえた問題の同一性、ヴェーバーにあたえたニーチェのインパクトという側面を強調するあまり、問題にたいする両者の解答のちがいに相対的に低い意義しかみとめてこなかったようにおもうのである。両者のあたえる解答の方向性はあきらかにことなる。このちがいがもっとも明瞭になるのが、ここでとりあげる科学論の分野にほかならない。

すでに確認したように、ニーチェは、科学のかかえる自己矛盾と、生をおびやかす価値喪失とがひとつの連関をなす問題であることをつきとめ、科学の枠外に身をおくことによってこの問題を解決しようとした。いっぽう、ニーチェの投じた問題を正確にとらえたトレルチュは、ニーチェの解決案を「野蛮化」への道としてしりぞけ、あくまでも科学の枠内にとどまりながらこの問題の解決をめざした。しかし、トレルチュは最終的に観念論へと回帰することによってみずから手でその解答を無効ならしめた。これにたいして、ヒンツェは、トレルチュにたいする批判論文において、この問題の解決を困難にしている要因を考察し、科学のかかえる自己矛盾と、生をおびやかす価値喪失というふたつの問題領域をいったんわけてかんがえるべきことを提案した。ここでのヴェーバーにかんする分析もヒンツェの提言にそってすすめられる。それは考察の便宜をかんがえてのことばかりではない。ふたつの問題領域をいったんわけるという視点を、おそらくヒンツェはヴェーバーの科学論からえているとおもわれるからである。

山之内氏も指摘しているように、ヴェーバーの諸論稿のなかで、ニーチェの影響がもっとも濃厚にみとめられるのが「職業としての学問」である⁽³⁾。この講演でヴェーバーがとりくんだ問題こそ、ニーチェの最大の関心事であった科学と生の関係をめぐる考察にほかならない。ただし、ふたりの解答の方向性はあきらかにことなる。ニーチェが科学にたいする生の支配に問題の解決をみようとするのにたいして、ヴェーバーは科学と生の関係をめぐる考察を注意ぶかく支配・従属の連鎖から解放することをこころみる。オットー・ゲアハルト・エクスレのことばを借りるならば、ヴェーバーにとって科学と生のあいだにあるのは「峻別」と「交流」の関

係なのである⁽⁴⁾。つぎに、エクスレの研究をてがかりとして、ヴェーバーの歴史主義問題にたいする解答を検討することにしたい。

ヴェーバーは「職業としての学問」と題する講演を、学問のおかれている現状を洞察することからはじめる。そのさい、重要なことは、「学問がいまや未曾有の専門化の段階にはいつているということ、しかもその傾向はこんどもずっとつづくであろう」という認識である⁽⁵⁾。学問の「専門職化」、およびそれにとまなう知識の「専門化」にたいするヴェーバーの態度については、すでに上山安敏氏らによる詳細な検討がある⁽⁶⁾。上山氏らは主としてドイツ社会学学会におけるヴェーバーの活動や発言を調査し、ヴェーバーが学問の「専門職化」、知識の「専門化」を学問の進歩にとって不可欠の要件とみなしていたことをあきらかにしている。むろん、ヴェーバーも、学問の「専門職化」に知識の「硬直化」という弊害がともなうことをじゅうぶん承知していた⁽⁷⁾。しかし、ニーチェとはことなり、ヴェーバーは学問の専門性の放棄という道をえらぶことはけっしてなかった。ヴェーバーは学問の問題と生の問題をいったん「峻別」するという姿勢をとった。したがって、ニーチェが諸悪の根源とみなした学問の「専門職化」を、ヴェーバーは生をおびやかす価値喪失の問題と直結させることはなかったのである。しかし、ヴェーバーにとって学問の「専門化」は学問の進歩のための前提条件でしかなく、それはけっして必要十分条件というわけではない。そこで、つぎにヴェーバーが学問の進歩をどのような性質のものとかがえていたかが問われなければならない。

ヴェーバーは、学問の意味をあきらかにするための考察を、学問の限界をみきわめることからはじめようとする。それは、学問の意味と芸術や宗教の意味との対比のなかでおこなわれている。そして、この考察はそのまま学問、芸術、宗教の「職分」のちがいをあきらかにする作業にもなっている。ヴェーバーによれば、学問上の仕事と芸術家の仕事のちがいは、「学問上の仕事にはたえず進歩がともなう」のにたいして、「芸術の領域ではそういう意味での進歩というものはない」という一点にもとめられる。このことはまたつぎのようにいいかえられてもいる。すなわち、「ほんとうに「じゅうぶんなできばえ」といえる芸術品ならば、けっして他に追いこされたり、時代おくれになったりするものではない」。いっぽう、「学問において「じゅうぶんなできばえ」といえる仕事はみな、あたらしい「問題」という意味をもったものであり、他の仕事によって「追い抜かされ」時代おくれになることをのぞんでいるものなのである」⁽⁸⁾。ヴェーバーのかんがえる学問の「進歩」は、ふつうイメージされる「進歩」概念とはいくぶんことなる。それはヴェーバーによって「無限へむかっての前進」'Fortschritt in das Unendliche'と表現されている⁽⁹⁾。ヴェーバーにとって学問研究は二重の意味で「無限へむかっての前進」となる。ひとつは、われわれをとりまく現象世界が無限であるという意味においてであり、いまひとつは、かかる現象世界を構成するわれわれの「観点」が無限であるという意味においてである。したがって、ヴェーバーのかんがえる学問の「進歩」は、「實在論的」な歴史

学が想定する学問の「進歩」とはまったくことなるものとなる。「無限へむかっての前進」という性格をもつ学問は、完成されたすがたを想像することもできないし、げんざいの達成度をはかることもできない。また、すでにみたように、ニーチェは芸術と学問を生におよぼす影響という観点から優劣の関係で論じていた。ヴェーバーにとって、芸術と学問はそれぞれが独自の原理にもとづく自律的な領域であり、したがって両者の生にたいする関係も必然的にことなるものとならざるをえない。そのかぎりでもふたつの領域に優劣をつけることはできないのである。

このことは宗教と学問の関係についてもあてはまる。ヴェーバーはそれを「神学」と「学問」のちがいで説明している。ヴェーバーにとって、神学の問題とは、「ひとつの世界像を全体として承認して、そのなかでいかにしてそれが合理的に解釈されるのか」ということにほかならない。そのさい、「その前提そのものは、神学にとっては、「学問」なんかの手のとどかぬところにある」。ここには、神は認識の対象にはならないという「唯名論」の伝統が生きている。神学の前提は、「通常理解されている意味での「知識」ではけっしてなく、むしろそれは「所有」である」とヴェーバーはいう⁽¹⁰⁾。つまり、認識と信仰はまったくことなる性格を有するものであり、そのような関係にあっては、認識が信仰の代用をつとめることはできないし、また、その逆もしかりなのである。ヴェーバーにとって、宗教と学問の「職分」はあきらかにことなる。そのことをヴェーバーはつぎのように表現している。

ひたすらに宗教的な献身のためにこのように知性を犠牲に供しても、それは、倫理的にいえば、つねに知的誠実さを率直にまもる義務を回避することとは、たしかにちがうからである⁽¹¹⁾。

ヴェーバーにとって、宗教と学問も、芸術と学問のばあい同様、優劣をつけることのできないそれぞれが自律的な領域なのである。

さらに、学問、芸術、宗教といった諸領域をいったん「峻別」しなければならない理由は、西欧文化が体験した「理知化」の過程をふりかえることからあきらかになる。「理知化」ないし「合理化」とは、ヴェーバーにとって、「いっさいの事物を予測によって支配できるということ」を意味する。それはまた「世界の脱魔術化」ともよばれ、ヴェーバーはそれにたいしておおむね肯定的な評価をあたえている⁽¹²⁾。しかし、かれは「世界の脱魔術化」が突きつけたあらたなる問題をもみおとしてはいない。この「理知化」の過程にとって決定的な役割をはたした要因として、ヴェーバーは「ギリシア人による概念の発見」とルネサンス人のはじめた「合理的実験」をあげる⁽¹³⁾。しかし、ヴェーバーは、「わたくしはここで一匹のしらみを解剖して、諸君に神の摂理の証拠をおめにかけてよう」というヤン・スワンメルダムのことばを引用し、

ルネサンス人にとってはまだ「学問の研究とは神への道であった」ことを指摘する⁽¹⁴⁾。この時代にはまだ「学問への道」は「神への道」とわがちがたくむすびついており、したがって、生と学問の二律背反といった問題が意識されることはなかったのである。しかし、さらなる「理知化」の進行によって状況は一変したとヴェーバーはみる。

学問の精神的な前提のうちで、うえにのべてきたものが、つまり「真の存在への道」だとか、「真の芸術への道」だとか、「真の自然への道」だとか、「真の神への道」さらには「真の幸福への道」などという、これまでの幻想がすべてすがたを消してしまったとすると、職業としての学問の意義としてのこるものはなんであろうか⁽¹⁵⁾。

ここには、学問、芸術、宗教といった諸領域をいったん「峻別」しなければならない歴史的な理由がのべられている。それと同時に、「世界の脱魔術化」にともない学問が体験したあらたな問題の本質も、もっともよくあらわれている。ひとことでいうならば、それは学問の「意味喪失」ということになる。そして、この逃れがたい事実が、「神への道」という論理をふたたびもちだすことなく、「職業としての学問」のあらたなる「意義」をうちたてようとする考察の大前提となる。

かつての歴史主義論争においては、学問と生との関係は優劣や支配・従属といった観点から考察されるのがつねであった。ニーチェは生にたいする学問の従属を主張し、いっぽう、ニーチェに批判される19世紀科学の代表者たちは暗黙のうちに生にたいする学問の優位を前提としていた。ヴェーバーは学問、生、宗教、芸術といった諸領域が他の領域にたいする優位を要求してひしめく様子を「神々の永遠の闘争」とよぶ。そして、過去何千年にわたるキリスト教の支配、すなわち「ひとつの神」の支配になれ親しんだ現代人は、この「神々の永遠の闘争をみるめがくらんでしまった」と述懐する⁽¹⁶⁾。生にたいする学問の従属という要求も、生にたいする学問の支配という要求も、おなじくこの「現代の文化の運命」のたえがたさから生じているのである。むろん、ヴェーバーはいずれの要求にも与することはない。かれは、「世界の脱魔術化」を体験した時代にあつては、学問も生も、宗教や芸術といった他の諸領域とならぶ一領域にすぎないことを確認し、それぞれが独自の価値をそなえるものとして両者をいったん「峻別」する。トルストイのことは引用しつつ、かれはこの前提をあらためて確認する。

「学問は無意味だ。なぜなら、学問は『われわれはなにをなすべきか』とか『われわれはいかに生きるべきか』とかいう、われわれにとって重要な、ただひとつの問題に答ええないからだ」と。学問がこういう答えをあたえないということは、あらそう余地のまったくない事実である⁽¹⁷⁾。

学問と生が独立した領域として「峻別」されていることは明白である。しかし、それは、学問と生を永久に「解消不能な二律背反」とかんがえるマイネッケのたちばとはあきらかにことなる⁽¹⁸⁾。すなわち、ヴェーバーは学問と生に関係にかんするたんなる傍観者ではないのである。さきの引用につづく箇所がそのことをしめしている。

問題なのは、学問が答えないのはどのような意味からかということであり、またそれに答えはせぬが、正しい問いかたをする人にたいしてはやはりなにか役にたつことをするのではないだろうかということにほかならない⁽¹⁹⁾。

ヴェーバーは、学問と生をめぐり考察を優劣や支配・従属といった観点から解放し、あらたなる地平でたてなおそうとする。すなわち、ふたつの領域を独自の価値をそなえるものとしていったん「峻別」したうえで、あらためて学問と生の「交流」のありかたを問うのである。

ヴェーバーのいう「正しい問いかた」とは、「無限へむかっての前進」という学問の性格づけと密接に関連している。「無限へむかっての前進」としての学問は、文字通り無数の「観点」が存在することをみとめることになり、したがってよりよき「観点」をたえず模索することがその「職分」となる。かかる「職分」をそなえる学問だけが生にたいしてなしうる貢献を、ヴェーバーは「明晰さ」をえさせることだという。つまり、学問はそれによって「実践的にある一定のたちば」をとることが可能になる「価値の評定」のための基礎を提供することができるのである⁽²⁰⁾。「価値の評定」とは、特定の「目的」にたいするさまざまな「手段」の得失をはかることにほかならない。しかし、学問の「意義」はかかる功利的な目的を満足させることにつきるものではない。ヴェーバーによれば、まさにこの「目的」こそが、「ほんとうに「究極の」問題をとりあつかおうとすると」、けっして自明のものではないのである。そして、ここにいたってようやく、学問自体が「明晰さ」のためにはたしうる最後の役だちについてかんがえることになり、ヴェーバーによれば、それは同時にまた学問の「限界」をあきらかにする考察ともなる⁽²¹⁾。

ヴェーバーにとって、学問とは「無限へむかっての前進」という性格をそなえるものであり、それゆえ無数の「観点」が存在することをみとめることが学問研究の出発点であった。そこから、よりよき「観点」を模索することが学問の「職分」となるのであるが、学問の本来の性格からすると、「観点」相互のあいだに優劣をつけることはできない。それは本来の宗教の「職分」である。ここに学問の越えがたい「限界」がある。人は宗教的に生きることはできても、学問的に生きることはできないのである。したがって、無数の「観点」のうちのひとつをとろうと決心することは、「あるひとつの神に奉仕する」ことを意味し、「それは同時にそれとはべ

つの神の体面をけがす」ことにつながる。しかし、この「限界」に学問の生にたいする最後の役だちもある。学問は、「個人個人にかれ自身の行動の究極の意味について弁明しなければならぬようにしむけることができるし、すくなくともその弁明の手だすけをすることはできる」のである⁽²²⁾。「弁明」がうまくいかなければ、それは、「正しい問いかたをする人」に、より説得的な「観点」を模索するよう促すであろう。しかし、人は自分の「観点」をささえている価値の体系に不備がみつかったとしても、簡単にそれをすてきれるものではない。そのばあいにも、学問は、自分の「観点」が唯一絶対の「観点」ではないということだけは、たえずおもしろおこさせることができるという。

ヴェーバーは、ニーチェが投じた科学と生の関係をめぐる問題に、ニーチェとも、またニーチェの投じた問題を正確にとらえ、それにたいする解決をあたえようとしたトレルチュともことなる地平で解答をあたえようとした。ニーチェは無数の「観点」がしのぎを削り、どれひとつとしてその価値を貫徹できない現状に、生をおびやかす「病」の本質をみた。そして、科学にはこの状況をいっそう悪化させることはあっても改善する見込みはないとかんがえ、科学の放棄によってこの問題を解決することを提案した。いっぽう、あくまでも科学の枠内にとどまりながら、ニーチェの投じた問題を解決しようとしたのがトレルチュである。しかし、トレルチュは、ふたたび絶対の「観点」を「再建」することができると確信したために、「観念論」へと逆もどりせざるをえなくなった。いっぽう、ヴェーバーにとって、ニーチェが危機とうけとめた無数の「観点」のこんとん状態は、「現代の文化の運命」として前提される。そして、学問はその「職分」に忠実にしたがうかぎり、どの「観点」の正しさも証明することはできない。学問にとって可能なのは、たえずよりよき「観点」を模索するためのきっかけを提供することだけなのである。したがって、ヴェーバーの歴史主義問題にたいする解決は、トレルチュの解決ともことなったものにならざるをえない。ヴェーバーにとって、「歴史主義の克服」の第一歩は、歴史主義がけっして克服されることはないということを積極的な意味でみとめることなのである。「歴史主義の克服」が可能であると想定するならば、無数の「観点」の抗争に決着をつける絶対の「観点」を導入せざるをえなくなる。しかし、それはひとつの「観点」を絶対視する歴史主義的な諸潮流のいずれかに回帰することを意味する。むろん、これは「無限へむかっての前進」という学問の「職分」にふさわしい問いかたではない。したがって、ヴェーバーにとって、歴史主義は克服されないということを見とめることは、「歴史主義の克服」のための第一歩であり、同時にそのすべてなのである。

(1) Mommsen, Wolfgang, J., Die antinomische Struktur des politischen Denkens Max Webers, in: *HZ* 233, 1981, S.35ff.とくに, S.39ff.; Peukert, Detlev J.K., Die 《letzten Menschen》. Beobachtungen zur Kulturkritik im Geschichtsbild Max Webers, in: *GG*

- 12, 1986, S.425ff.; Hennis, Wilhelm, Die Spuren Nietzsches im Werk Max Webers, in: *Jahrbuch der Akademie der Wissenschaften in Göttingen* 1985, 1986, S.40ff.; Oexle, a. a.O., S.21ff., S.25ff. und S.86ff.; Germer, Andrea, *Wissenschaft und Leben. Max Webers Antwort auf eine Frage Friedrich Nietzsches*, Göttingen 1994.
- (2) 山之内靖著『ニーチェとヴェーバー』未来社, 1993年; 山之内著『マックス・ヴェーバー入門』岩波書店, 1997年。
- (3) 山之内『ヴェーバー入門』, 39頁。
- (4) Oexle, a.a.O., S.84.
- (5) Weber, a.a.O., S.588. 出口訳, 366頁。
- (6) 上山安敏・三吉敏博・西村稔編訳『ヴェーバーの大学論』木鐸社, 1979年。
- (7) 前掲書, 206頁以下。
- (8) Weber, a.a.O., S.592.出口訳, 370頁。
- (9) Ebd., S.593.出口訳, 371頁以下。
- (10) Ebd., S.611.出口訳, 388頁以下。
- (11) Ebd., S.612f.出口訳, 390頁。
- (12) Ebd., S.594.出口訳, 372頁。
- (13) Ebd., S.596.出口訳, 374頁。
- (14) Ebd., S.597.出口訳, 375頁。
- (15) Ebd., S.598.出口訳, 376頁。
- (16) Ebd., S.605.出口訳, 382頁以下。
- (17) Ebd., S.598.出口訳, 376頁。
- (18) Meinecke, Friedrich, a.a.O., S.367ff.引用は, S.378.
- (19) Weber, a.a.O., S.598.出口訳, 376頁。
- (20) Ebd., S.608.出口訳, 385頁。
- (21) Ebd., S.608.出口訳, 385頁。
- (22) Ebd., S.608.出口訳, 385頁以下。

3. ヴェーバー(2)―「歴史的文化科学」としての歴史学―

ヴェーバーは「正しい問いかたをする人」に「明晰さ」をあたえることが学問の「職分」であるという。このことは、正しくない問いかた、いいかえるならば「明晰さ」をあたえない学問が存在するとかれがかんがえていることを示唆している。正しくない問いかたとは、まさしく「無限へむかっての前進」という学問の性格にそぐわない問いかたのことである。ここにいたってわれわれの考察は、歴史主義論争におけるいまひとつの論点であった学問的認識の「客観性」にかんするヴェーバーの議論へとみちびかれることになる。

ヴェーバーが認識の「客観性」にかんする考察を主として展開しているのは、1904年の論稿「社会科学および社会政策の認識の「客観性」」である。この論稿の目的は、「文化生活一般にかんする科学においては、「客観的に妥当な真理」とはどんな意味で存在するのか」という疑問にこたえることにある⁽¹⁾。ヴェーバーの「客観性」問題にたいする解答は、1880年代にカー

ル・メンガーとグスタフ・フォン・シュモラーのあいだでくりひろげられた国民経済学の「方法論争」や、世紀転換期に新カント派が提示した認識論上の問題をつうじて、歴史主義論争のなかで議論された認識の「客観性」をめぐる問題と密接に関連するものであった⁽²⁾。

ヴェーバーは、みずからの構想する社会科学を「文化科学」‘Kulturwissenschaften’ というカテゴリーに分類する。そして、「文化科学」とは、「人間の生活の諸現象をその文化意義の観点のもとで考察する学問」であるとする⁽³⁾。「文化科学」は文化諸現象を個別的な原因に因果的にさかのぼらせてきわめてゆく。そのかぎりでは、「文化科学」は「歴史的」認識を追求していることになる⁽⁴⁾。トレルチュはわれわれの思考を形而上学の支配から解放したことに「歴史化」の功績をみた⁽⁵⁾。この点はヴェーバーによってもじゅうぶん承認されている。ヴェーバーの構想のなかでも、歴史研究は文化諸科学をつらぬき中心的な地位をしめているのである。しかし、「文化科学」にとって歴史研究の意義はこれにつきるものではない。歴史的文化科学が対象とする文化現象は文字通り「無限の多様性」をもってあらわれてくる。そのなかで科学的な把握の対象となりうるのはつねに「現実の有限な一部分」にすぎない⁽⁶⁾。この選択は特殊な種類の「観点」のもとでおこなわれるものであり、したがって研究者の「価値理念」なくしてはなされえない⁽⁷⁾。ヴェーバーは、この「価値理念」が科学的にとりあつかわれるべきこと、批判的に評価されるべきことを要請する。

その批判はこういう目的をかかげることによって、意欲する人間をたすけて、かれの意欲の内容の底にある究極の公理を、いいかえれば、かれが無意識のうちにそこから出発していたり、ないしは一論理の一貫性をもとめるならば一出発しているといわねばならないような究極の価値基準を、自分で反省させるようにすることができるのである⁽⁸⁾。

ヴェーバーは文化現象の選択を方向づけている「価値理念」を対象化すべきことを説くのである。むろん、かかる「価値理念」は歴史的に形成され、「歴史的に変化するもの」であることはいうまでもない⁽⁹⁾。したがって、「価値理念」の対象化は歴史化というかたちをとらざるをえなくなる。ここに「文化科学」にしめる歴史研究のいまひとつの意味がある。「価値理念」の歴史化という問題は、ヴェーバーが学問の最後の役だちとしてあげる「弁明」の仕方と密接に関係しているようにおもわれる。みずからの「観点」を「弁明」するために必要となることは、その歴史性を認識しておくことだからである。

すでにみたように、ニーチェは歴史認識が前提とする「客観性」を「永遠の無主体性」としてしりぞけた。これにたいして、ヴェーバーは歴史認識が特定の「価値理念」からしかうまれえず、その「価値理念」が「主観的」なものであることを指摘する。したがって、ヴェーバーにとっては、歴史認識が価値をうまないことが問題なのではなく、それが意図せず特定の価値

に奉仕することが問題となる。ここにもふたりの思想家の歴史主義問題にたいする対応のちがいがあらわれている。ヴェーバーにとって歴史認識が意味を破壊することが問題なのではなく、それがいかなる意味を創造できるかが重要となるのである⁽¹⁰⁾。

さて、ヴェーバーはみずからのめざす社会科学を「現実科学」Wirklichkeitswissenschaftともよんでいる⁽¹¹⁾。しかし、ヴェーバーのいう「現実」とは、「實在論的」な歴史認識が想定する「現実」とはあきらかにことなるものである。無限の多様性をもつ現実が還元されるような「法則」の定立をめざすばあいにも、現実からそのもっとも小さな断片をとってきて、それを即对象的に記述することをめざすばあいにも、それが完全になされるのは不可能であるとヴェーバーはいう⁽¹²⁾。ここには「学識ある無知」の伝統がいきているようにおもわれる。「唯名論的」な前提にたつならば、最大者と最小者の認識はともに不可能とされる⁽¹³⁾。ヴェーバーは現実にたいするアプローチをけっして放棄することはないけれど、けっきょくそれは近似的にしか理解できないものであるとことをわきまえている。そして、かかる観点から法則定立的な認識手続と個性記述的な認識手続が批判にかけられることになる。

まず、ヴェーバーは経験的な実在を還元しうる「法則」を定立することが文化現象の「客観的な」とりあつかいであるとするたちばを批判し、「個性的な事実の因果的な説明」の体系をかかえることは不可能であるとする⁽¹⁴⁾。そして、たとえ上述した意味での「法則」の定立が可能であるとしても、それは「正しい問いかた」とはみなされない。それが「正しい問いかた」といえないのは、「文化現象や精神的な現象」が「法則的に経過することがすくないという理由」からではない。むしろ、法則定立的な手続の問題は、「社会法則の認識」が「社会実在を認識するために必要とするさまざまな補助手段のひとつにすぎない」という事情をみおとしてしまうことにある。そもそも「社会実在の認識」とは、「無限の内容」のなかから「有限な一片」をとりあげることにはかならず、かくしてそれはとりあげる一片に「意味と意義」をみとめる「人間のたちば」に拘束されてもいる。結果的に上述した意味の法則定立的な手続は、「社会実在の認識」を可能にする「価値理念」の存在をも視界のそとにおいやることになる⁽¹⁵⁾。したがって、みずからの「観点」をたえず反省するための契機をそこから期待することはむずかしくなるのである。

ヴェーバーは法則定立的な手続がはらむ問題を指摘した。しかし、かれはこの手続の有効性を全面的に否定するわけではない。「因果法則にかんする知識は研究の目的ではありえず、むしろ、その手段たりうるのみである」という原則を固持するならば、「法則」は「文化現象の意義の理解」をさまたげるものではない⁽¹⁶⁾。「研究の手段」としての「法則」とは、ヴェーバーがこの論稿のなかでもちいる中心概念のひとつである「理念型」のことにほかなるまい。たんなる「法則」と「理念型」のちがいは、「法則」が現実体をうつしだすものであるとかがえられるのにたいして、「理念型」は「その概念的な純粋さにおいては現実のどこにも経験的に

はみいだすことはできない」ものと理解されている点にある。現実が存在するとかんがえたときに「理念型」はもはや研究の「手段」たることをやめ、それは研究の「目的」に転じる。つまり、「理念型」が現実と一致しないということは、ヴェーバーにとって積極的な意義をもつことなのである。それは、現実が「理念型」にどれほどにているか、あるいはどれほどへだたっているかをはかるための基準を提供する⁽¹⁷⁾。「理念型」は「現実をそれにかけてはかる基準となり、現実を比較してみるもと」となる⁽¹⁸⁾。さらに、それは現実が「理念型」からへだたる原因をかんがえるための「高度の索出的な価値」をそなえたものであり⁽¹⁹⁾、「叙述にたいしてははっきりした表現手段をあたえようとする」ものでもある⁽²⁰⁾。ヴェーバーは實在論的に理解される法則概念がはらむ問題を指摘し、「理念型」という説明のためのモデルがもつ有効性を強調する。かれにとって学問的認識の「客観性」とは、経験的に妥当する「法則」を定立することにあるのではない。かかる「法則」を発見することはそもそも不可能であるし、たとえ発見できたとしても、それは「無限へむかっての前進」という学問の性格にてらして「正しい問いかた」とはかんがえられない。「無限へむかっての前進」としての学問は、現象世界の無限の多様性、それにたいする無数の「観点」の存在をみとめることを前提とする。そこから、みずからの「観点」を問いなおすための契機をつくるという学問の「職分」もうまれてくる。いっぽう、「實在論的に理解される法則概念は、現実をみる「観点」の可能性をとざす方向に作用する。ヴェーバーにとって、これは宗教の「職分」ではあっても、けっして学問の「職分」ではないのである。

「理念型」にたいする理解は、科学的認識の「客観性」にかんするヴェーバーの考えかたをもつよく規定している。ヴェーバーにとって、そもそも現象の性格とは、「その性格がその現象そのものに「客観的に」付着しているがために」うまれるものではなく、それは「われわれの認識関心の方向によってつくりだされているのである」⁽²¹⁾。この点でかれの認識論上の前提は實在論的なそれとは決定的にことなる。そして、それが科学的認識の「客観性」にかんする考えかたのちがいをももたらす。

学問の研究領域の根底にあるものは、「もの」の「即物的な」連関ではなくして、問題の思考上の連関なのである⁽²²⁾。

ヴェーバーにとって、科学的認識の「客観性」とは、「もの」の「即物的な」関連づけの成功具合にではなく、「問題の思考上の連関」の「論理的な「完全性」」にこそもとめられるべきものである⁽²³⁾。

さいごにヴェーバーは、歴史家がそれでもなお「理念型」という「概念構成や理論のくみだて」に抵抗をしめすであろうことを予測する。歴史家は、「理念型」というものが支配すると

いうことは、「学問がまだ未熟な段階にある」ことの証左であるという主張をくりかえすにちがいないとヴェーバーはみる。そして、かれは「それはある意味では正しい」という⁽²⁴⁾。ただし、それが正しいのは、歴史家がかんがえるであろう消極的な意味からではない。予想される歴史家からの反発にかんする考察は、そのまま個性記述的な手続がはらむ問題の考察につづいているのである。

ヴェーバーにとって、学問がつねに未熟な段階にあるということはそもその前提なのである。「文化科学」においては、「概念構成は問題設定に依存するし、またこの問題設定というのは文化の内容そのものとともにうつりかわる」⁽²⁵⁾。つまり、すぐれた「理念型」の構成は、みずから追いつめられ時代おくれになることをのぞんでいるものなのである。ヴェーバーはここに歴史的な学科の「永遠の若々しさ」が保証されているとみる⁽²⁶⁾。しかし、「歴史学派の代表者」たちには理念型的な構成は消極的な意味にしか理解されない。かれらは「いつの日か『完全な』したがって演繹的なひとつの科学がそこからうまれること」を暗黙のうちに前提としており、「げんざいの歴史的―帰納的な研究はわれわれの科学が不完全なためにおこる予備的な研究である」とかんがえている。これにたいして、ヴェーバーはこのような考えかたを「古代の―スコラ学的」なたちばとしてしりぞける⁽²⁷⁾。つまり、歴史学派の問いかたもまた「正しい問いかた」とはみなされないのである。「理念型」の価値を認識できない個性記述的な手続がもたらすのは、「せいぜいのところ無数に多い個別的な感覚にかんする『実存判断』のこんとんとした状態」以上のものではない⁽²⁸⁾。そして、このたちばも現実を構成するさいの「観点」の介入を否定することによって、「観点」が無数に存在するという可能性をとぎす方向に作用することになる。ヴェーバーにとって、それはやはり宗教の「職分」ではあっても、学問の「職分」ではないのである。

以上の科学的認識の「客観性」をめぐる考察は、間接的に科学と宗教の「職分」のちがいをもあきらかにするものである。ヴェーバーにとって、「科学と信仰」のあいだには「髪の毛ほどの細い境界線」‘haarfaine Linie’しか存在しない⁽²⁹⁾。その境界線とは、じゅうぶん注意を払っていても、予期せずふみこえてしまうような微妙な一線なのである。

(1) Weber, *Objektivität*, S.147. 出口訳, 51頁。

(2) Germer, *a.a.O.*, S.62ff.

(3) Weber, *a.a.O.*, S.165. 出口訳, 68頁。

(4) Ebd., S.163f. 出口訳, 67頁。

(5) Troeltsch, *a.a.O.*, S.1ff. 邦訳は、『諸問題（上）』, 13頁以下。

(6) Weber, *a.a.O.*, S.171. 出口訳, 73頁。

(7) Ebd., S.181f. 出口訳, 82頁以下。

(8) Ebd., S.151. 出口訳, 56頁。

- (9) Ebd., S.183.出口訳, 84頁。
- (10) Ebd., S.154.出口訳, 58頁以下。
- (11) Ebd., S.170.出口訳, 72頁。
- (12) Ebd., S.177.出口訳, 79頁。
- (13) ニコラス・クザーヌス著(山田桂三訳)『学識ある無知について』平凡社, 1994年, 24頁以下。
- (14) Weber, a.a.O., S.177.出口訳, 79頁。
- (15) Ebd., S.180f.出口訳, 81頁。
- (16) Ebd., S.178.出口訳, 80頁。
- (17) Ebd., S.191.出口訳, 91頁。
- (18) Ebd., S.194.出口訳, 94頁。
- (19) Ebd., S.198f.出口訳, 98頁以下。
- (20) Ebd., S.190.出口訳, 91頁。
- (21) Ebd., S.161.出口訳, 65頁。
- (22) Ebd., S.166.出口訳, 69頁。
- (23) Ebd., S.200.出口訳, 100頁。
- (24) Ebd., S.205.出口訳, 105頁。
- (25) Ebd., S.207.出口訳, 106頁以下。
- (26) Ebd., S.206.出口訳, 105頁。
- (27) Ebd., S.208.出口訳, 107頁。
- (28) Ebd., S.177.出口訳, 79頁。
- (29) Ebd., S.212.出口訳, 111頁。

IV 歴史主義問題と「歴史的社会科学」

ドイツにおける科学と生の関係をめぐる考察は、1933年に政治によって決着がはかられた。国民社会主義は、生活世界や科学をおそう相対主義の危機という問題を、あたらしい価値規範の定立によって解決することを約束した。あたらしい価値規範とは「民族」と「共同体」にほかならず、科学は「民族共同体」の生に奉仕することによって、生との二律背反という問題になやまされることなく存在することになっていた。ニーチェのいう生は国民社会主義者によって「民族共同体」の生に格下げされた。これは、現代社会にあっては生もまた有限の一領域としてしか存在しえないことの一証左といえよう。

歴史的諸科学においては、民族の生に奉仕する科学という要請は、「有機体論」の伸長という結果となってあらわれた⁽¹⁾。もともとは国文学や民俗学に特徴的な歴史観であった「有機体論」を、歴史学内部にも受容するものがあらわれる。しばしばドイツにおける社会史の草分けと評価される「民衆史」‘Volksgeschichte’である⁽²⁾。この時代の歴史的諸科学がまきこまれた時代精神をひとことでまとめるならば、それは、有機主義やそこから発展した生物学至上

主義の、歴史主義にたいする同化強制のころみであったといえる。歴史学科は、全体としてみるならば、他の歴史的諸科学とくらべ比較的よく有機主義による浸食にたいしてもちこたえることができた。しかし、それは逆に、歴史学科にとってこの時代がそれだけいっそうきびしい冬の時代であったことを意味する。歴史家の信奉する「客観性」はきびしい批判にさらされた。ドイツの歴史家にとって、科学と生の関係をめぐる考察は、ひさしくかつての過酷な時代を想起させるものでありつづけた。今世紀の60・70年代にビーレフェルト学派の「歴史的社会科学」によって克服されたという歴史主義も、20・30年代に活発に議論された歴史主義問題とはまったく別物になっていたのである。

かつての歴史主義問題と自分たちのあつかう歴史主義問題のちがいについては、「歴史的社会科学」を支持する史学史家たち自身のみとめるところでもある。たとえば、ヨーロッパ歴史学の新潮流をあつかった書物のなかで、ドイツの歴史学にかんする考察に「歴史主義から「歴史的社会科学」へ」というタイトルをあたえ、「歴史的社会科学」によって歴史主義は克服されたという理解に先べんをつけたゲオルク・G・イッガースは⁽³⁾、みずからのかんがえる歴史主義と20・30年代に克服がめざされた歴史主義とはまったくことなるものであることを断言し、ドイツの歴史学にとって克服が重要なのは前者の歴史主義問題であることをあらためて強調する⁽⁴⁾。また、すでに何度か引用したイェルン・リュゼンも、歴史主義問題から些末実証主義のもたらす弊害、相対主義の危機といった問題を厳格に排除すべきことを主張していた⁽⁵⁾。かれらにあっては、かつての歴史主義論争において中心的な課題であった生活世界や科学をおびやかす相対主義の危機という問題は、もはや対象化されてはいないのである。

げんざいドイツを代表する社会史家のひとりユルゲン・コッカの弟子ヴィリー・オーバークローメは、その近著のなかで19世紀以降のドイツ歴史学が発展させた歴史主義の特徴を以下の四点に要約している。

- (1) 国家の政策、外交、軍事的衝突、政治舞台上での具体的な事件の経過といったテーマへの研究の集中。かくして、歴史的発展を左右する立役者としての傑出した歴史上の人物への関心の収れん。
- (2) 金科玉条としての史料批判。また、あつかわれる史料のかたより。文書館に保管される公文書、証書、報告、書簡、議事録、覚書、回想録類の重視。そして、これらの史料にたいする過度な信頼は、それによって過去の現実を特殊な現象として「理解的」に再構築できるという観念をもたらした。
- (3) 国家政策の諸状況や主役たちの行動にかんする叙事的な描写、些事にわたる再現。
- (4) 伝統にとらわれない方法、とりわけ社会科学的な方法にたいする拒絶。そして、それは「外来の」、すなわち西ヨーロッパ的で「合理主義的」な、啓蒙化された思考伝統にたいする根ぶかいルサンチマンによって増幅された⁽⁶⁾。

(4)の特徴との関連で、「啓蒙主義にたいする批判が歴史主義のひとつの構成要因」とされることもある。さらにすすんで歴史主義をロマン主義や保守主義と同一視するものもある。しかし、この点で「歴史的社会科学」によって克服されたとされる歴史主義は、われわれがここで考察の対象としてきた歴史主義問題とは決定的にことなるものであることがわかる。われわれが問題にする歴史主義は、「中世のおわりに個々の諸科学の解放がはじまった」ときに、しかし、より決定的なかたちで「前世紀の末」にふるい「形而上学」がはじめて「歴史的意識と歴史科学」によって「解放」されたときにはじまった問題（ディルタイ）⁽⁷⁾であり、「思惟の自然化、あるいはより正しくは思惟の数学化ののちに18世紀になってしだいに生じてきたもの」（トレルチュ）⁽⁸⁾であり、ヴェーバーにとってもそれは西欧文明が体験した「理知化」があらたにつきつけた問題と理解されていた。つまり、われわれのあつかう歴史主義とはすぐれて近代的な現象であり、けっして反近代思潮にのみ限定されるものではないのである⁽⁹⁾。

さて、オーバークローメは上述の歴史主義を克服した「歴史的社会科学」の功績を以下の四点にまとめている。

- (1) 純政治史・純事件史・純人物史的な考察様式の偏狭な優位にたいする抵抗。
- (2) 隣接諸科学、とくに社会科学、政治学、経済学の方法の導入。これら諸学科の理論、モデル、手続、カテゴリーの受容と、それらの歴史研究のための実用化。
- (3) 純叙述的な描写にたいする抵抗。社会的集団現象、および景気循環、人口誌的な発展、社会的格差の現象形態といったマクロな歴史過程の分析。それにともなう数量的手続にもとづく統計学的な記述スタイルの活用。
- (4) 政治的・教育学的な責任の自覚。「批判的」、解放的な科学としての自己認識。かくして、西欧的な啓蒙主義にたいするシンパシーの強調⁽¹⁰⁾。

ここには歴史主義が「歴史的社会科学」によって克服されたとするたちばの定番ともいえる理解があらわれている。では、われわれが考察の対象とした歴史主義問題にとって、「歴史的社会科学」はいかなる意味をもつものなのだろうか。

(2)の隣接諸科学の方法の受容という点で、もっとも重視されるのはほかならぬマックス・ヴェーバーの受容である⁽¹¹⁾。すでに考察したように、ヴェーバーは歴史主義論争のなかで議論された諸問題とふかくかかわることによって、問題の本質が有限存在である人間が無限の現象世界といかなる方法で対話することが有益かという点にあることを見抜いていた。かれは学問研究を「無限へむかっての前進」と理解し、そのための有益な手続として「理念型」による考察方法をしめしたのである。「歴史的社会科学」もヴェーバーの「理念型」の価値をみとめている。しかし、「歴史的社会科学」にはヴェーバーのいう「無限へむかっての前進」という視点が欠落しているのもまた事実である。このため、「歴史主義の克服」への道は、歴史主義がけっして克服されないことを知ることにあるということに、「歴史的社会科学」の代表者たちはおも

いいたらない。これは、ヴェーバーの科学論をそれ以前の歴史主義論争の歴史と切れたところで理解していることに原因があるとおもわれる。つまり、「歴史的社会科学」はヴェーバーの「理念型」がもつ問題史上の意義までは受容していないのである。したがって、かつての歴史主義問題を対象化する視点を欠く「歴史的社会科学」は、現実の理解は不可能であるとするヴェーバーの考えかたを消極的な意味でしかうけとめることができない。たとえば、「歴史的社会科学」の旗手ハンス・ウルリヒ・ヴェーラーが、「過去は認識主体からは独立した構造をもつ」という確信に固執しているのがそのよい例だといえる⁽¹²⁾。しかし、この点が「歴史的社会科学」の認識論上の限界をあらかじめ設定していたようにおもえてならないのである。学問史研究にたいしても多大な貢献をなした中世史家フランティšek・グラウスは、後世のヴェーバー受容の問題点をつぎのように指摘している。

評判のよくない理論欠乏は（かなりおくれた）マックス・ヴェーバーの受容によって充足されたようにみえる。しかし、そのさいまだ一安全のために一ヴェーバーの理念型は空疎な「現実型」「Realtyp」へと格下げされていたのである⁽¹³⁾。

ヴェーバーにとって「理念型」は「その概念的な純粋さにおいては現実のどこにも経験的にみいだすことができない」と理解されていた。「歴史的社会科学」がヴェーバーの「理念型」を「現実型」として受容しているとするならば、それは、すくなくともわれわれの問題にしている歴史主義との闘いからはかぎりない撤退を意味するものでしかありえない。これは両者のとらえている問題のちがいに由来するものとおもわれる。すなわち、ヴェーバーがふかく関与した歴史主義問題と、「歴史的社会科学」が克服したという歴史主義問題は、その性質がまったくことなる問題なのである。近年ふたたびドイツの文化諸科学においてかつての歴史主義問題が頭をもたげてきた。歴史学もまた例外ではない。歴史家も60・70年代の歴史主義論争を介してよりも、直接20・30年代の歴史主義論争ととりくみは始めている。そして、その過程でヴェーバーの歴史主義問題にたいする寄与があらためて評価されつつある⁽¹⁴⁾。

ヴェーバーの認識論上のたちはは、「理念型」の理解にみられるように、オットー・ヒンツェが「唯名論的」とよんだ姿勢にほかならない。ヴェーバーによれば、われわれが対象の性格を認識するのは、「その性格がその現象そのものに「客観的に」付着しているがためではない」。むしろ、対象の性格は、「われわれの認識関心の方向によってつくりだされている」という。ここには、あきらかにカント（Immanuel Kant, 1724—1804）の批判哲学の発展的な継承がみられる。カントは、『純粋理性批判』の第二版（1787年）への「序文」のなかで、「対象が認識を規定する」という前提の限界を指摘し、逆に「認識が対象を規定する」という前提をとることを提案した⁽¹⁵⁾。前者の前提がヒンツェが「実在論的」とよぶたちばであり、後者の前提が

かれが「唯名論的」とよぶたちばである。「實在論」においては対象は認識とは独立に存在するものとされ、認識のありかたに左右されないひとつの現実の存在が想定されることになる。結果的に、實在論的な認識はひとつの観点のみを優遇することになり、ことなる観点到に不寛容になるという特徴がある。ヴェーバーは学問の「職分」を現実生活において選択肢の幅をひろげることにあるとかがえた。それゆえ、かれは實在論的な歴史研究を学問ではなく、しばしば「信仰」と同一視する⁽¹⁶⁾。いっぽう、「唯名論」は現象世界には認識された対象しか存在しないことを前提とする。したがって、「唯名論的」な認識は無数の観点の存在をみとめることになり、ことなる観点にも寛容に對することができるとなる。「唯名論的」なたちばにとつては、ことなる観点はたえずみずからの観点を見直すための契機をつくるものとして尊重されることになる⁽¹⁷⁾。

19世紀のドイツ歴史学を見渡すとき、カントの批判哲学の痕跡をドロイゼンの史学論のなかにみとめることができる。ドロイゼンにとって、歴史認識とは生起した歴史の模写ではなく、思考による構想であるとされる。この点でドロイゼンは歴史学と物理学を同等におく。物理学の「誇らしげな全構築物」は、けっして表面的な自然現実の再生産ではなく、それは「認識しようとする精神のなかにのみ存する」ものである⁽¹⁸⁾。歴史学においてもおなじく「事象の表面的な存在」が認識されるわけではなく、「認識された存在、認識された出来事だけ」が存することになる⁽¹⁹⁾。ドロイゼンにとって、歴史とは「出来事の総体でもなく、事象万般の全経過でもなく、出来事にかんする認識である」⁽²⁰⁾。したがって、歴史にかんする認識もあらゆる科学的認識同様、仮説的な認識の域をでるものではない。むしろ、歴史学のばあいにも、認識は素材に即していなければならず、認識は経験的に獲得される⁽²¹⁾。しかし、人間は「うまれたときから、もしくは受胎のときにはすでに」、「予測のつかない歴史的な事実」の影響にさらされている⁽²²⁾。したがって、「歴史研究は、われわれの自我の内容Der Inhalt unseres Ichもまた歴史的な産物であるという視点を前提とする」⁽²³⁾。歴史を認識し、探求する個人は、みずからの対象と離れてむきあっているわけではなく、むしろ、みずからの対象に積極的に関与していることになる。そこから、研究というものが観点や構想にほかならないという事実が、同時に可能な観点や構想の数が無限に存在するという視点がうまれてくるのである。

この観点にたつならば、われわれが対象の性格とよぶものに表出しているのは、ドロイゼンのいう「われわれの自我の内容」であり、また、ヴェーバーのいう「われわれの認識関心の方向」にほかなるまい。そして、「自我の内容」、「認識関心の方向」が無数に存在することをみとめるならば、学問的な営みは文字通りヴェーバーのいう「無限へむかっての前進」という性格をもつことになる。「無限へむかっての前進」としての学問は、その完成されたすがたを想像することもできないし、げんざいの達成度をはかることもできない。あるのはよりよき観点を模索しつづけることだけである。したがって、学問的な営みの本来の意義は、たえず「われ

われの認識関心」の位相をたずね、それを刷新することにおかれなければならない。しかし、19世紀以降学問が体験した急速な「専門職化」、それにともなう業績にたいするあくなき要求は、ともすれば学問的な営みが有するこの本来の価値を忘却させる方向に作用したのである。19世紀後半に沸騰する歴史主義論争のなかで批判の矢面にたたされたのは、学問的認識のわれわれの生にたいするよそよそしさという点であった。もしこの主張に一分の理があるとするならば、その原因は「われわれの認識関心の方向」を知るという学問本来の課題が、あくなき業績への要求のたかまりのなかで摩滅してしまったことにもとめられよう。そして、この喪失は「歴史的社会科学」によっても回復されてはいない。そうだとすれば、われわれのつぎなる課題もさだまるはずである。げんざいのドイツの歴史学が、「われわれの自我の内容」、「われわれの認識関心の方向」を対象化することにはいかなるかたちでとりくみ、また、それはどの程度なされているのかが検討されなければなるまい。むろん、「われわれの自我の内容」、「われわれの認識関心の方向」もまた歴史的な産物であることを知るならば、その対象化は歴史化というかたちをとらざるをえないことはいうまでもない。それについては別稿を期さなければならないのだが、つぎの点だけは確認しておいてよさそうだ。すなわち、われわれの歴史主義問題の解決のために、ことさら「あたらしい歴史学」をこしらえる必要はないのである。

- (1) 拙稿「生物学至上主義への道—ひとつの歴史観のたそがれ—」『人文学報 京都大学人文科学研究所』77号, 1996年, 1頁以下。
- (2) 「民衆史」の歴史については, Oberkrome, Willi, *Volksgeschichte. Methodische Innovation und völkische Ideologisierung in der deutschen Geschichtswissenschaft 1918—1945*, Göttingen 1993.
- (3) Iggers, Georg G., *Neue Geschichtswissenschaft. Vom Historismus zur Historischen Sozialwissenschaft*, München 1978, S.97ff.邦訳は, (中村幹雄他訳)『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房, 1986年, 107頁以下。
- (4) Iggers, Georg G., Historismus im Meinungsstreit, in: Oexle, Otto Gerhard und Rüsen, Jörn(Hg.), *Historismus in den Kulturwissenschaften*, Köln 1996, S.7ff.
- (5) Rüsen, a.a.O., S.27f.
- (6) Oberkrome, a.a.O., S.12ff.
- (7) Dilthey, *Einleitung*, XVf.邦訳は, 『精神科学序説 (上)』, 9頁。
- (8) Troeltsch, a.a.O., S.9f.邦訳は, 『歴史主義とその諸問題 (上)』, 26頁。
- (9) 啓蒙主義と歴史主義の関係という問題は, 近年歴史主義をめぐるおこなわれたシンポジウムにおいても大きな争点のひとつとなっている。Oexle und Rüsen(Hg.), (a.a.O.) 所収の諸論稿。
- (10) Oberkrome, a.a.O., S.16ff.
- (11) *Ebd.*, S.228.
- (12) Wehler, Hans-Ulrich, *Geschichte als Historische Sozialwissenschaft*, Frankfurt a. M. 1980³, S.32.
- (13) Graus, a.a.O., S.643.なお, グラウスと同様の視点を共有するとおもわれるものとして, デート

レフ・ポイカート著（雀部幸隆／小野清美訳）『ウェーバー 近代への診断』名古屋大学出版会，1994年。なお，ポイカートと「歴史的社会科学」の関係については，（小野清美／田村栄子／原田一美訳）『ワイマル共和国—古典的近代の危機』（名古屋大学出版会，1993年）の「訳者解説 ポイカートと近代」を参照。同書，261頁以下。

- (14) Oexle, *a.a.O.*.ポイカート，前掲書。Hardtwig, Wolfgang, *Geschichtsreligion—Wissenschaft als Arbeit—Objektivität. Der Historismus in neuer Sicht*, in: *HZ* 252, 1991, S.1ff.
- (15) Kant, Immanuel, *Kritik der reinen Vernunft*(*Philosophische Bibliothek* 37a), Hamburg 1976, S.17ff.邦訳は，（篠田英雄訳）『純粹理性批判（上）』岩波書店，1967年⁷，25頁以下。
- (16) Hardtwig, *a.a.O.*, S.15ff.
- (17) Oexle, *a.a.O.*, S.26ff.
- (18) Droysen, Johann Gustav, *Historik. Rekonstruktion der ersten vollständigen Fassung der Vorlesungen*(1857), *Grundriß der Historik in der ersten handschriftlichen* (1857/1858) *und in der letzten gedruckten Fassung*(1882), hg.v. Leyh, Peter, Stuttgart 1977.引用は，*Vorlesungen von 1857*, S.8.
- (19) *Ebd.*, S.9.
- (20) *Grundriß der Historik von 1857/58*, §1, S.379.
- (21) *Ebd.*, §2, S.397.
- (22) *Vorlesungen von 1857*, S.14.
- (23) *Grundriß der Historik von 1857/58*, §15, S.399.

〔追記〕 本稿は，平成九・一〇年度文部省科学研究費補助金奨励研究(A)による研究成果の一部である。